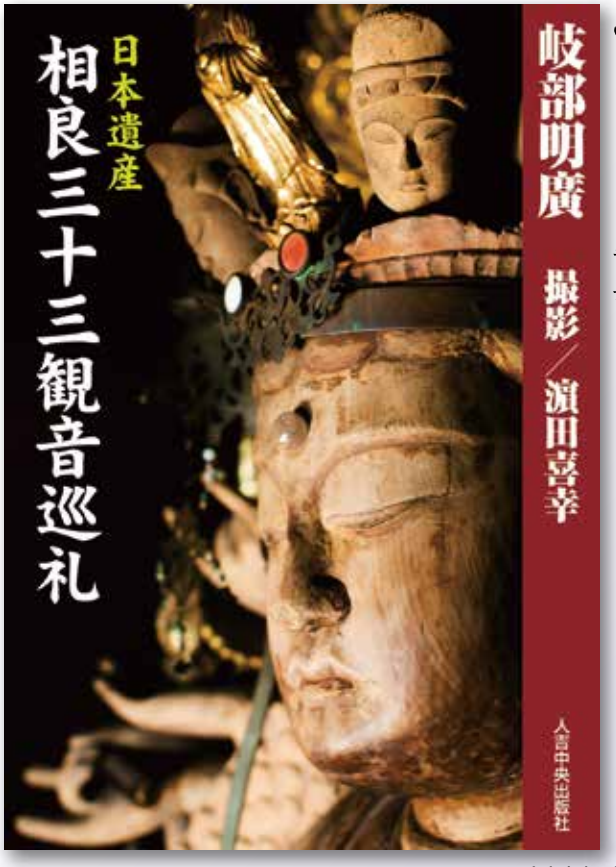
月刊くまがわ春秋 第7号 2016年10月9日発行
企画：人吉球磨総合研究会 発行：人吉中央出版社
〒868-0086 熊本県人吉市下原田町瓜生田 675-3
TEL・FAX 0966-22-7601
http://www.hitoyoshi.co.jp/ info@hitoyoshi.co.jp
定価 540円 本体 500円

また、巡礼の旅に出よう。

相良三十三観音と人吉球磨の「日本遺産」を熱く語ったずしりと重いガイドブック



■A5判／並製本／424頁／オールカラー
■定価 2,000円（+税） 送料 200円

人吉市内と錦町の書店
外山胃腸病院で取扱い中。
遠方の方は下記までご注文ください。

目次

第1章 観音さまベストテン巡礼
第2章 古典的江戸時代コース巡礼
第3章 ぶらり旅巡礼
第4章 健脚高齢者コース巡礼
第5章 健脚若者コース巡礼
第6章 奥球磨コース巡礼
第7章 千手観音巡礼
第8章 十一面観音巡礼
第9章 如意輪観音巡礼
第10章 隠れ念仏巡礼
第11章 御詠歌ベストシックス巡礼
第12章 伝説を楽しむ巡礼
第13章 墓から歴史を楽しむ巡礼
第14章 脇役を楽しむ巡礼
第15章 山頭火と巡礼
第16章 神社廻りと巡礼
第17章 夏目友人帳聖地巡礼
第18章 お彼岸でない日の巡礼
第19章 「須恵村の女たち」を楽しむ巡礼
第20章 人吉温泉と巡礼
第21章 国指定重要文化財を楽しむ巡礼
第22章 球磨川・川辺川を楽しむ巡礼
第23章 隠れキリシタン巡礼
—巻末付録—
・相良三十三観音霊場一覧
・相良三十三観音巡礼地図

直販の申込は 〒868-0086 熊本県人吉市下原田町瓜生田 675-3
TEL・FAX0966-22-7601 info@hitoyoshi.co.jp
人吉中央出版社

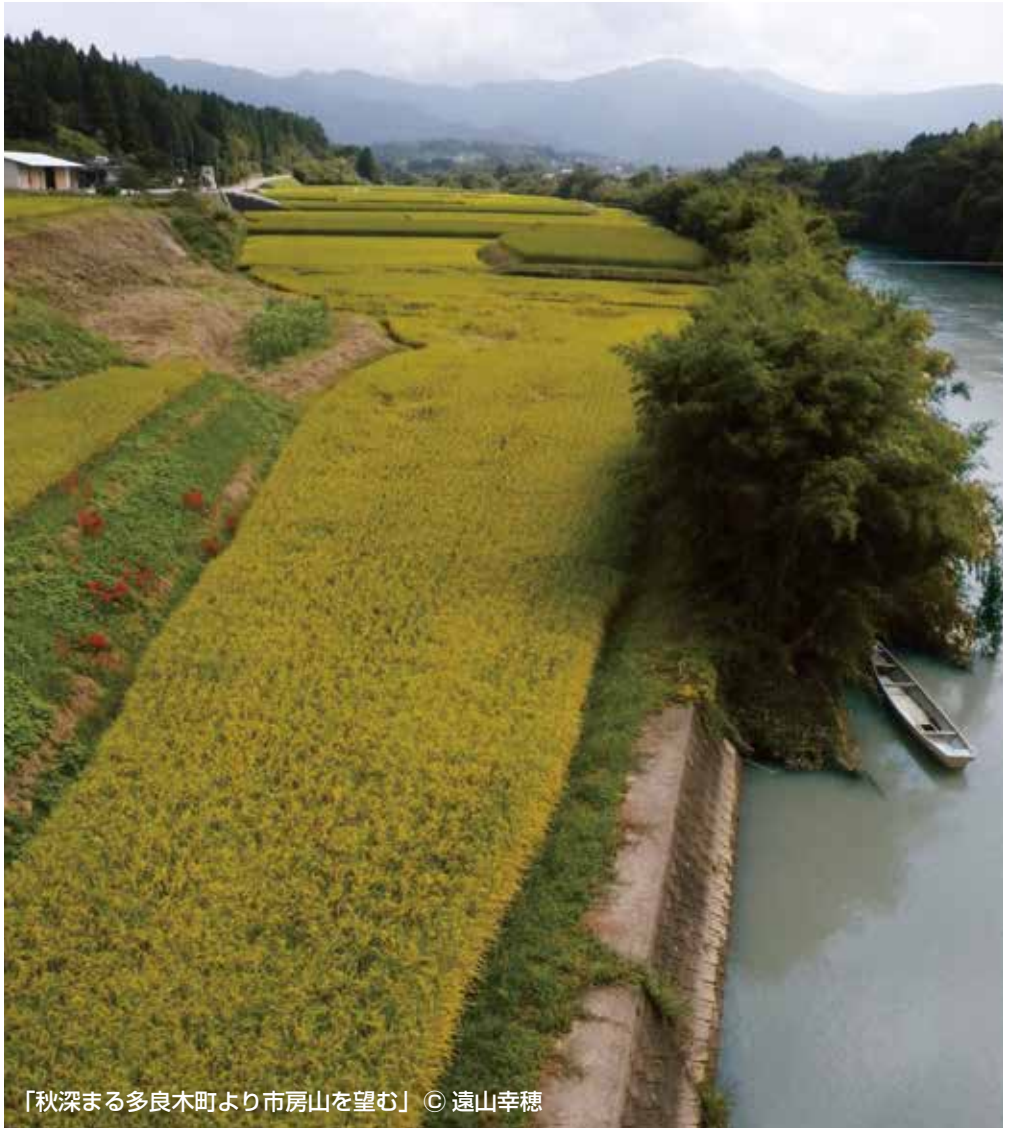
雑誌 81779—10
4910817791069
00500

流域の人々と歩む月刊誌

くまがわ春秋

2016 10 第7号

特集 秋から始まるものがたり



「秋深まる多良木町より市房山を望む」© 遠山幸穂

今月の一言　『文読む月日』（レフ・トルストイ編著　北御門二郎訳）より

善良であることが習慣になってしまった状態ほど、自分の生活や人々の生活を美しく飾るものはない。

表紙
「球磨郡多良木町より市房山を望む」
撮影　遠山幸穂（球磨郡あさぎり町）



今月の詩（うた）　⑦

人吉球磨児童生徒文詩集「やまぎり」から

第 34 号（2006 年 3 月発行）　選・作文の会

雲

西瀬小 5 年　土屋光太郎

雲は　ものまね名人だ
色々なものに変身する
アイスや車にもすぐになる
見られないときもある
見られた人はラッキーさ
見つけてみるのもいいかもね
雲は　とてもすごい
ものまね名人だ

【評】ものまね名人と喩えているところがおもしろい。光太郎さんはきっといつも雲を見ては、いろいろな物を思い浮かべているのだろう。読者に呼びかけるように書いているところもうまい。



中原小 2 年　寺原仁野

― 月刊「くまがわ春秋」10 月（第 7 号）目次 ―

巻頭言「東京オリンピック考」／1
特報　人吉市に「鮎のやな場」オープン／3
遊び図鑑⑥「ずぐっしょとつるし柿」松舟博満／5
医食同源③「秋に想う『身土不二』」浦川春加／6
最近のおもな出来事／6
「ひろしのげっかん・ぎひょう」／6
「球磨川って、いいな」内田順子／22
記憶の落ち穂⑦「対馬丸出港の時」坂本福治／25
「奈良木神社・観音堂をあるく」森山　学／32
「伝統の食材・かずら豆腐」亀田宏子／36
柳人があじわう漱石俳句⑦いわさき楊子／39
「定吉が行く⑦」鳥飼　博／40

流域周辺の自然と暮らし

①行徳岩／14
②与奈久の河原／17
③むかい・はぎ／20

カラーページ

続報「鶴之湯旅館」再開直前！／12
昭和の写真館⑦「八代のボラ釣り」／7
里山「ドンコの煮付け」森屋浩美／16
駅・ものがたり⑦「吉尾駅」松本晋一／26
ほいくのなかで⑦「さざなみ保育園」／30
旬「トマトのレシピ３題」宮内祥子／31

「『川に学ぶ』に参加して」森　明香／43
「好きです・八代トマト」立迫なぎさ／46
「とっておきの場所」桑原智子／49
「多良木町奥野・中山観音讃歌」岐部明廣／50
「『相良三十三観音巡礼』私話」上村和代／51
「うたせ船で水俣病を学ぶ講座」松本晋一／53
「『明治熊本地震』と金田楢太郎」木﨑康弘／56
「松村保広君の近況報告」永田満徳／62
「人吉藩の地震④」尾方保之／64
方言を味わう⑦「球磨弁クイズ」前田一洋／67
くまがわ春秋歌壇「いもご短歌会」／69
「郡築干拓の農業⑦」磯田　毅／70
「くまがわ狂句」村上鬼拳／71
「おがんで歩き記・食べて歩き記」中島まゆみ／73
「トンネルを抜けてみると」西　洋子／74
「天井裏の生活者⑤」久馬　凌／77
鶴鴿短歌会「八月詠草」／79
「老神神社に行かんばんよ」宮原信晃／80
「故郷の野づら」村上ますえ／81
「おどん達ちゃー柳別府婦人会」上杉芳野／82
「文豪の作品を読んでみました」野崎育代／84
「八代新庁舎建設問題」上村雄一／86
東京オリンピック⑦「ドーピング」苅田吉富／89
「字図で見る球磨の地名⑦」上村重次／90
「お寺と戦争⑤」山本隆英／93
「くまがわ英語塾⑦」藤原　宏／95





巻頭言　東京オリンピック考

昭和39年（１９６４年）10月10日、東京オリンピックが開催された。選手たちの活躍はいまでも鮮明に記憶している。しかし、同オリンピックが日本にとってどういう意味をもち、どういう役割を果たしたのか、「成功」・「失敗」の基準は別にして、うまくいった大会だったのかと問われると一挙に分からなくなる。そもそも、そうしたことをこれまで考えたことはなく、現代史のひとコマすら知らないことに気づく不勉強を改めて知る。52年前の「祭典」を、いまさら、あれこれと考えても意味がないとの意見もあろうけど、そうではあるまい。52年前のオリンピックは４年後のオリンピックにつながっている。

なぜ、東京で、もういちどオリンピックを開催しなければならないのだろうか。52年前の東京オリンピックが「成功体験」として日本人の意識に定着し、「夢よ、ふたたび」ということか。そういう人もいるだろうけど、52年前と較べると、オリンピック開催に否定的な人もずいぶん増えている。開催するためには一定の費用を要するけれども、その費用を投じるほどの価値がオリンピック開催にはないとみているのだ。それとは反対に、オリンピックの経済効果を強調する意見もある。開催準備によって経済需要が強まり、それを通じて経済全体も活性化するという。

オリンピックに限らず、日本の公共事業は予算規模を膨らませていく傾向がある。招致段階では開催費用は約7千億円であった。その後、予測金額はしだいに増加し、現時点では3兆円を超えるまでになっている。そういうなか、先日、大阪府が万博開催の方針を表明した。政府も賛成しているようだ。ここでまた考える。もう一度、万博を大阪でなぜ開催しなければならないのか、と。官房長官は、日本の魅力を海外に示す絶好の機会であると発言したけれども、日本の発信力はいまだに弱いということであろうか。

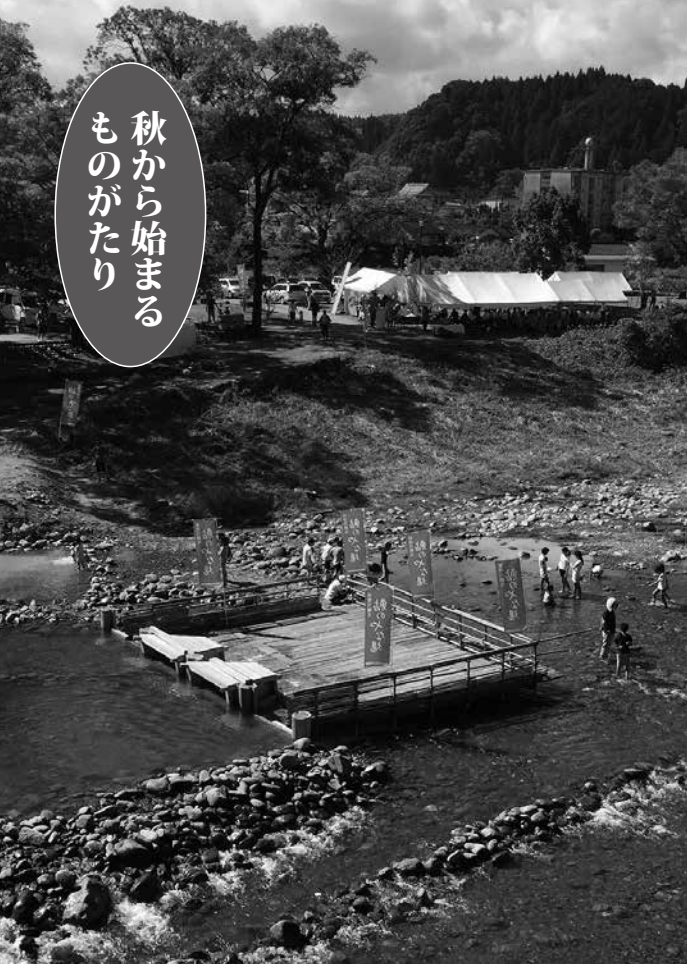
東京オリンピックも大阪万博も悪いとは断言しないけれども東北復興、熊本復興も日本の課題だ。「夢」は必要だが、「現実」を無視すべきではない。東北も熊本も、まだ、復興からほど遠い。

（編集部）

特報

人吉市に「鮎のやな場」オープン

観光復興願って球磨川漁協が発案



人吉市の中川原公園に設置された「鮎のやな場」（10月1日）

突然、人吉市の中川原公園そばの球磨川に「竹」で作られた構造物が出来ていた。４月の熊本地震により県内の観光が大打撃を受けているなか、復興への起爆剤になればと、５月に球磨川漁協（小早川宗一組合長）が事業主体となり、国や県、同市、観光協会などで「球磨川観光鮎やな場設置委員会」を立ち上げて準備を進めてきたもので、竹で編んだ横８メートル、縦６メートルの大きさの「鮎のやな場」がそれだ。

10月１日に人吉市の中川原公園で行われた開所式には、来賓など約60人が出席。神事のあと、小早川組合長が「来期はもう少し大きなものをもう１基設

置したいと思っている。今後、人吉市の活性化につなげたい」とあいさつ。来賓が祝辞を贈ったあと、集まった大勢の子どもたちがやな場と周辺の川に分かれて鮎のつかみ捕りを体験した。

やな場の設置期間は11月30日まで、営業時間は午前10時から午後7時。子ども向けのやな場体験学習は随時受け付け中で、問い合わせは同漁協（電話０９６５・３２・３２６６）へ。


やな場で鮎のつかみ捕りをする子どもたち（10月1日）

炭火で焼いた鮎を堪能

やな場の近くに設置されたテントでは鮎の塩焼きと田楽が有料で食べられる。常駐して販売を担当する「あゆや吉村」の吉村 勝徳さん（67）は、「炭火で焼いた鮎は絶品。来年につなげるため球磨川鮎の美味しさをアピールしたい」と意気込む。


炭火で焼いた鮎を販売する吉村さん

料金は大きさによって違うが天然鮎が1匹７００円から１０００円、尺鮎が２０００円で、養殖鮎は1匹５００円。


その場で球磨川鮎を味わうことができる

ふるさと遊び図鑑 ⑥　絵と文／松舟博満

ずぐっしょとつるし柿



夏休みもきゃしまえて、あすびだれしとった所けぇ「ずぐっしょずぐっしょ」鳴きがやうったてば、だれてどまおられんめぇひなった。ずぐっしょ（ツクツクホウシ）て云いおった蝉でおどめ「柿の食いぎゃなったぞ、熟れすぎてずぐっしょんなってつこくっぞ」ていっかせぎゃずぐっしょずぐっしょて鳴くとんごて聞こえおったで、柿の木んほぅどる蝉ん云うこっじゃって、ほんなこっじゃろうて柿ちぎりん始まった。

一番に食わるっげひなったとがボンガキで小みんかったばってんゴマのずびゃひゃっとって甘かったいどん種は、あたんみゃ（あたりまえ）ひやっとったで食う所らちっとじゃった。そっからキャアラこん柿きゃはじめんこら渋かったいどん熟るれば、ゴマん入って甘もうなっおったばってんが一時すれば渋ん戻って云いおいやいたで、こん柿ばっかりゃ食うて見らんば甘かっじゃりろ渋かっじゃりろ分からんじゃったばつてん、ゴマの入っとる甘かとのぬさったときにゃ、ほかん柿よまんまかった。

【まつふね・ひろみつ／青井阿蘇神社・文化苑「童遊館」】

医食同源③
秋に想う「身土不二」

食育を始めて10年
浦川春加

秋分の日も過ぎ、秋らしくなってきました。

栗の季節がやってきましたね。栗農家の友人も毎日、栗の収穫に追われています。

私が、この世で一番尊敬する職業は、農家さんです。

彼らがいないと、生きてさえゆけないからです。

熊本地震で、私は炊き出し支援を続けていますが、熊本がいかに水と米と食材に満ちているか、日々感じております。今までたくさんの農家さんから、「炊き出しに使って。」と野菜や米を寄付して頂きました。おかげ様で、支援も続けられています。

日本人は元々、農耕民族です。

田畑を耕し、命をつないできた民族です。

私たちは、穀物を消化するのに優れた内臓を持っています。胴長短足はそこから来ているという説も納得できます。



パン食が増えてしまった現代。「お米を食べよう！」とわかっていても、ついつい手軽を選べる自由な時代。おいしいパン屋さんもたくさんありますね。

まずは自分が日本人である、という基本に立ち返ることが大事だと思います。歴史や文化から教わることがたくさんあるからです。

選食力を鍛えるのは、根本を学ぶことだとも思うのです。

ここで、「身土不二（しんどふじ）」という言葉を紹介します。仏教用語なのですが、仏教では「因果応報」の意味でも説かれています。

「食」での身土不二は、「身（自分）」と「土（今居る環境）」は切り離せない「不二」という意味です。もっと言うと、「自分と同じ空気を吸っている食物を食しなさい。」という意味にもなります。言わば、地産地消ですね。

その日採れた物が、その日の内に食卓へ上がる。

これは、とっても贅沢なことなのです。

田舎に住んでいると、これをついつい忘れてしまいます。でも、新米ができたり、栗が出始めたり、根菜が活き活きしてきたり。そんな季節の変わり目にふと改めて思えるようになってきました。

我が家では小さい頃から、庭の畑で採れた野菜が食卓へ上がっていました。

球磨人吉が産地であることは、誇れることであり、感謝すべきことです。

農法はそれぞれ違っても、認め合える環境になったら、もっといいと思います。

食べることは、生きることです。

生きる意味があるように、食べる事にも意味があります。

生きる意志があるとき、食べる事にも意志をもって取りかかりたいものです。

いろんな生き方、あっていいと思います。いろんな食があっていいと思います。

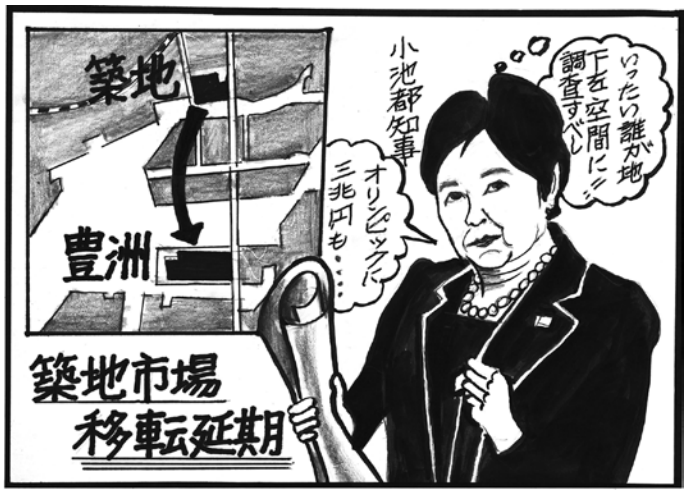
もうすぐ、新米が食べられます。ワクワクする、素敵な秋になりますように。



【うらかわ・はるか／人吉市「さんぽカフェオーナー」】

最近のおもな出来事

9月10日（土）
▽あさぎり夜市（あさぎり駅前広場）
9月17日（土）
▽観月祭（くまがわ鉄道湯前駅レールウイング）
9月18日（日）
▽熊本地震復興支援チャリティショー（あさぎり町須恵文化ホール）
▽棚田の里をのんびり歩く学校（水上村岩野川内地区）
9月19日（月）彼岸入り
▽相良三十三観音めぐり秋の一斉開帳（～25日）
9月21日（水）
▽秋の全国交通安全運動（～30日）
▽熊本復興応援企画 劇団男魂プロデュース公演「イノチボンバイエ」（～22日、人吉市カルチャーパレス）
9月22日（木）秋分の日
▽動物フェスタ2016（人吉クラフトパーク石野公園）
▽人吉球磨美術（絵画）連盟作品展（～25日、多良木町体育館）
9月25日（日）
第12回やまえ栗まつり（山江村役場周辺）
▽さんがうら「棚田まつり」（球磨村交流館）
▽山木康世ライブ「2016人吉 秋の陣」（人吉市カルチャーパレス）
9月30日（金）
▽熊本県公民館大会・熊本県社会教育研究大会合同大会（人吉市カルチャーパレス）



ひろしの…
げっかん・ぎひょう

―どうなっている自治体。政務活動費の不正受給や豊洲移転問題―

「市民や都民が知らないうちに税金が食いものにされている。領収書の偽装にカラ出張。東京都の汚染土壌と地下の空洞化。食の安全が問われるなか余りにも無責任。」



秋から始まるものがたり

11月の営業再開に向けて本格的な準備段階に入った鶴之湯旅館

続報

「鶴之湯旅館」再開直前！

八代市坂本町の老舗「鶴之湯旅館」の再開が秒読み段階に入った。予約すれば11月には同旅館を利用できる（予約は利用の2日前まで）。1泊6千円（夕食・朝食付）で、2組の宿泊者から受け付ける。

国道219号線を走り、気になり八代市役所に問い合わせた宮崎県の人もいるほど。土山大典（だいすけ）さんが同旅館の再開を決意した理由もそこにある。

大典さんは同旅館の創設者・土山茂さんのひ孫で、子どもの頃から「この旅館を継ぐのは僕しかいない」と信じ、今年4月に、父親の英憲さん（茂さんの孫）にその旨を打ち明けたのであった。その経緯については前号で紹介したとおり。

同旅館の魅力

同旅館を利用したいという読者は多い。その理由はさまざまだが、同旅館の建物を挙げる人が多い。球磨川沿いの「木造三階建」はやはり絵になる。宿泊しなくても、旅館内に入らなくても、建物自体を楽しみたいと多くの人はいう。近くに行徳岩などもあって、文字どおり、見せる旅館だ。

先月末、大典さんに旅館を再開する理由を再度質問した。大典さんは「建物と周辺の景色に魅力があるからです」と明るい声でいった。







新調した暖簾が掛けられた玄関（上）
鶴の絵をモチーフにした障子（左）
古い火鉢も味わいが（左下）

大典さんは、旅館そのものが大好きで、同旅館で利用していた物（置物、食器など）をそのまま使用する。先日、大典さんに特別に夕食をつくっていただき、大典さんの料理を楽しんだが、そのとき、むかしからの食器に料理が盛られていた。60年以上前の食器が活きていた。小鉢には鶴の図が浮かんでいた。食器にかぎらず、同旅館は「鶴」を重視してきた。大典さんもそれを引き継ぎ障子に鶴の絵を薄く貼っていた。

食台の横には火鉢が置いてあった。火鉢も昔からのものだった。「もっと大きい火鉢があるのですけど、重たく動かせないので、小さめのものにさせていただきました」と大典さんは言った。

大典さんの料理

大典さんは、大学卒業後、韓国の大学に留学し、そのとき料理の修行を重ねている。そうしたキャリアを知っていたので、大典さんがどのような料理を用意してくれるのか、楽しみであった。韓国風の品が一品あったほかは、完全な和風であった。編集子の年齢を考慮してくれたのか、薄い味付けの品ばかりで美味しくいただけた。食材の大半は坂本産のもので、「キッチンハウス」さん、や、「道の駅さかもと」から仕入れたとのこと。坂本産のものにこだわりを示す、大典さんの意気が編集子には嬉しかった。鮎帰会の亀田宏子さんの好意で「かずら豆腐」を大典さんにお渡しした。大典さんにとても喜んでいただけた。大典さんは、森屋浩美さんの「ギギの西京漬」の記事に関心を寄せていた。そのうち、カズラ豆腐やギギの料理がでるかもしれない。写真には掲載していないけれども、もちろん、ご飯付きである。希望すればビール、日本酒、焼酎も出してくれる（ただし、別料金にする予定）。



地元の食材を中心に調理された夕食の膳



火の不始末を戒めた注意書き

テレビなし・絶対禁煙

建物と風景を楽しんでいただくのが目的なのでテレビは置かない予定。

木造3階造りということもあって室内は禁煙。これは創業時からの方針で、創業者・茂さんの「タバコの火を消さずに置いた人は見当たり次第にげんこつ百」の注意書がいまも残っており、火の取り扱いについて厳しかった。大典さんが禁煙を強調するのも、その「禁煙」の発想は茂さんに由来している。茂さんは、家族以外の人には笑顔を絶やさなかったことで有名な人物。この注意書きはそういう茂さんが同旅館をいかに大切にしていたかを示している。

昭和の写真館 7

旧坂本村中心に昭和20年後半から40年後半までの出来事をカメラに収めていた故・東儀一郎さんが残した写真を紹介する。

撮影／東儀一郎

八代のボラ釣り

左頁の写真の撮影年月日不明。

ボラは海水魚だが、河口や内海の汽水域に多く生息する。それだけでなく、淡水域に遡上することもある。球磨川でも遡上していた。人吉附近までさかのぼっていた例があると耳にしたことがある。少なくとも、一勝地（球磨村）までは確実に遡上していた。西鎌瀬（八代市坂本町）の古老によると、荒瀬ダム建設（昭和29年12月25日営業運転開始）直前までさかのぼっていた。ただし、遡上数は少なく、たまに網にかかる程度だった。網をいためるので、ボラがとれても喜ばなかった。





現在の遥拝堰（八代市豊原上町）



ボラ釣りするため遥拝堰に向かって歩いていく男たち（昭和30年代の撮影か）

上の3人は遥拝堰に向かって歩いている。同堰はボラ釣りのメッカであった。男たちの影をみると、午前10時頃に儀一郎さんは写真を撮っている。一見すると、鮎釣りを終えた若者が家路につく姿にみえる。しかし、そうではない。竿の形状から、ボラ釣りだと分かった。鮎用より大きい針をつかった。（編集部）



同位置より撮影した現在の様子（県道158号線）

流域周辺の自然と暮らし

① 行徳岩（ぎょうとくいわ）



① 行徳岩（八代市・坂本町）

鶴之湯旅館の上流にある巨岩である（写真①・②）。「行徳」は山伏の別称で、この岩が山伏の修行場であったことからその名がついたという。地元では「うの岩」と呼ぶ（熊本県企業局作成図参照＝写真③、『坂本村史』770頁は「通称卯ノ岩」とする）。

山伏がじっさいに行徳岩で修行したのかは不明である。維新政府は、明治5年（1872年）9月15日付太政官布達で、山伏の活動の一切を禁止し、それを境に、山伏の数は急減した。山伏の呪術的行為を明治政府は嫌ったのであった。しかしながら、根絶せず、山伏は今もいる。

同岩上流の上鎌瀬地区の山中には昭和20年代まで山伏がいた。古老によると、「秘宝」の薬を製造し販売していたらしい。古老の指摘した場所に行ったところ、確かに生活の跡らしきものがあった。そのことも含めて、行徳岩の名前由来についての山伏修行説を完全に否定できない。他方、「うの岩」の名称由来は分からない。



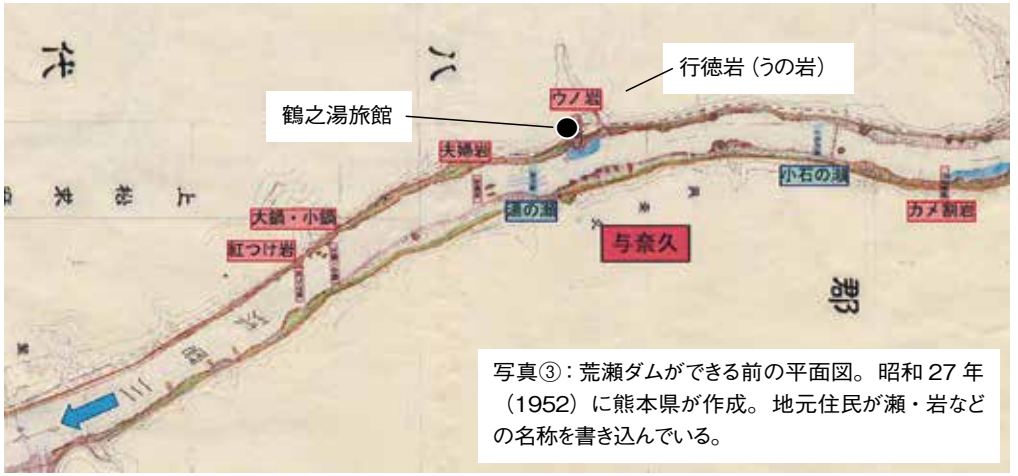
② 鶴乃湯温泉側から見た行徳岩



④ 湯鶴隧道

山伏の修行場というよりも、鎌瀬地区と葉木地区の交通を遮断する通行の難所であったことに人々の記憶は残っている。一見するだけで、岩が通行を阻害していることが分かる。これを解消する努力は早くから試みられてきた。それが実際に実現したのは昭和6年であった。岩をくり抜いてトンネルにし交通の便を確保したのだった（写真④）。「湯鶴隧道（ずいどう）」という（地元では、「湯の鶴トンネル」と呼ぶ）。トンネル工事は昭和3年（1928年）12月に開始し、地元住民の協力（公役）をともないながらも、基本的には、熊本工兵第六大隊が工事を担当した。

上流側からトンネルを抜けると、直ぐに鶴之湯旅館の横に出る。巨岩のため鶴之湯旅館からは上流側の肥薩線を見ることはできない。仮にトンネルがなかったとする。鶴之湯旅館は現在地に建設されたであろうか。行徳岩はそういうことを想像させる岩である。



写真③：荒瀬ダムができる前の平面図。昭和27年（1952）に熊本県が作成。地元住民が瀬・岩などの名称を書き込んでいる。

里山の恵みをいただく⑥

ドンコの煮付け



森屋 浩美

ドンコ（ドンカチョ）は、見た目は今ひとつですが、臭みもなく白身の美味しい魚です。

ドンコの特徴

全長は25㎝に達し、日本産の淡水ハゼ類としてはカワアナゴ類に匹敵する大型種である。他のハゼ類に比べて頭部が大きく横幅があり、垂直方向にやや押しつぶされて（縦扁して）いる。

口は大きく、唇が厚く、下顎が上顎より前に突き出ていて、上下の顎には細かい歯がある。胴体は円錐形に近く頭部と比べると短い。胸びれは扇形で大きく発達する。腹びれは完全に二つに分かれる。体色は褐色で、第１背鰭・第２背鰭・尾鰭の基底に計３対の黒い斑紋がある。周囲の環境や精神状態などによって、頭部に不規則な斑紋が出現する場合がある。また、繁殖期のオスは全身が黒っぽくなる。

【生息環境】西日本をおもな分布域とする。流れが緩やかで底質が砂礫の、河川や湖、池沼、水田、用水路等に生息する。一生を淡水域で過ごす純淡水魚である。群れを作らず単独で生活し、縄張りを形成する。夜行性で、昼間は岩石、流木、水草の下等の物陰に潜む。

【食性】食性は動物食で、魚類・水生昆虫・甲殻類等小動物を幅広く捕食する。非常に貪欲で、口に入りさえすれば自分と同じ大きさの動物にも襲いかかる。ただし動かないものには反応しない。

【もりや・ひろみ／八代市坂本町】

作り方

材料

ドンコ：適宜
みりん　100ml
醤油　100ml
砂糖　小さじ1

①ドンコはうろこを落とし内臓を取り除ききれいに洗い水気をきる
②鍋にドンコを入れみりん・醤油・砂糖をいれて落し蓋をして煮る



流域周辺の自然と暮らし

②与奈久（よなぐ）の河原



① 坂本町与奈久

鶴之湯温泉（八代市坂本町）の対岸（球磨川左岸）を「与奈久」という（写真①）。江戸初期の文献は「よなぐ村」とし、江戸中期以降、「与奈久村」と表記した。

「与奈久」という文字をみて、多くの人は「日奈久」を想起する。「両者は関係があるのですか」との質問もでる。地元の人も「日奈久から山を越えた場所だから与奈久という」と両者の関係を認める。中心は「日奈久」で「与奈久」は周辺で、「日奈久」の「日」は昼間を、「与奈久」の「与」は夜を表していると住民はいう。日奈久西寺の旧記に、本堂建立にあたり与奈久村で切組し球磨川で流したとの記載があるという（馬場継治「昔のくらし　球磨川と舟船」『公民館報さかもと』（昭和54年1月1日）。そうした事情も両者の関係を地元住民に意識させる理由になっている。

ところで「山を越えた場所」という説明は誇張ではない。旧坂本村から日奈久は地理的に遠いと誤解している人が少なくないけれども、じっさいには山をひとつ越えれば日奈久にいける。旧坂本村の人々にとって日奈久はいわば近場である。日奈久からみれば坂本は日奈久の近場だ。そうした事情から、日奈久のお寺と坂本の住民は密接な関係にある。

「日奈久」は、「火ながるる」に由来すると説明する人もいる。「火ながるる」は不知火を指す。

鶴乃屋の板前さんは日奈久の老舗旅館「金波楼」（写真②）の出身で、名前を釘崎さんといい、大典さんの大叔母（祖父・初男さんの妹）しげのさんと結婚している。



② 日奈久の老舗旅館「金波楼」



③ 山頭火ゆかりの日奈久「おりや」

山頭火は日奈久温泉を愛し、漱石夫人の鏡子は同温泉の宿を汚い田舎宿とけなした。そのせいか、日奈久は山頭火をしのび漱石を無視する（写真③）。

与奈久には大きな河原があった。「与奈久の河原」という。河原の砂地では大根などを栽培していた。それは、どの河原でも普通に存在した風景だ。しかし、与奈久の河原は牛を放牧するほどに広かった。河原のなかでも特別の存在だった。千反（梅檀）町（八代市）の漁民の野営地でもあった。千反の漁民は球磨川をさかのぼって鮎漁をしていた。彼らは人吉市まで上っていたという。彼らは野営をくりかえしながらさかのぼったが、与奈久の河原はそうした野営地（宿泊地）のひとつであった。


④ 与奈久薬師堂

千反町の漁民と与奈久の住民とは積極的に交流しなかった。彼らが鮎をとっても、それを非難する者はいなかった。それだけ鮎はいた。

与奈久の河原は、天保時代の山崩れで生まれたと地元の人は伝える。それを示す文章があるというので調べたけれども、いまのところ、その資料をみつけていない。

与奈久には2軒の別荘もあった。与奈久が温泉地であったことから、分限者が別荘を建てた。鶴喰の元湯、与奈久、鶴之湯は地図上の直線に並んでいるが、三者の関係は分からない。

2軒の別荘のひとつは元八代市長・故岩尾豊の所有であった。岩尾は県議会議長を務めたあと八代市長になった人物だが、旧八代市の出身ではない。「合志野（オシノ）」地区（坂本町）の出身者である。昭和24年初頭に球磨川流域でのダム建設の動きは表面化したが、そのときから、岩尾は県議会議員としてダム建設にかかわった。荒瀬ダム建設については櫻井三郎元知事、澤田一精元知事の名前を語ることが多い。しかし岩尾豊の名前を看過できない。彼は両者以上に重要な役割を果たした。

荒瀬ダムの建設によって「与奈久の河原」も別荘もダム湖に沈んだ。ダム建設前には約20軒の家屋があったが、その多くも水没した。薬師堂で「子ども相撲」をおこなうなど与奈久集落は賑わっていた（写真④）。子ども相撲はなくなった。現在は4軒の世帯が同地区で生活している。


絵／坂本福治

流域周辺の自然と暮らし

③むかい・はぎ



① 葉木橋

八代市坂本町に「葉木」集落と「破木」集落がある。両者は「葉木橋」で結ばれている（写真①）。右岸側が「葉木」で（写真②）、左岸が「破木」である（写真③）。行政は前者を「はき」とし、後者を「はぎ」と表記し、発音がちがうとする。しかし地元では両者をともに「はぎ」とよぶ。同一発音であることから、両者を区別するとき、前者を「葉っぱのはぎ、葉書のはぎ」と説明し、後者を「やぶれ・はぎ」と説明する。年配の人は前者を「八代はぎ」、後者を「芦北はぎ」という。葉木は八代郡に属し、破木は芦北郡に属していたことによる。対岸を「向かい・はぎ」と表現する場合もある。この用法は球磨川流域全体にみられるもので特異ではない。「淋（そそぎ）」と「向（む）かい淋（そそぎ）」（ともに球磨村）はその代表例である。



② 葉木集落



③ 破木集落

葉木橋は道田又一村長時代に完成した（昭和53年3月31日）。そのため同橋を「道田橋」いう人もいる。道田村長は葉木集落出身で、彼の妹（キミエ）は鶴之湯温泉の板場をしきることになる。土山の家は荒瀬ダム建設前には葉木橋の下にあった。同橋は長さ204メートル、幅7・3メートルで、同橋開通前は、葉木・破木間の移動は渡し舟に頼っていた。荒瀬ダム湖の地のため、舟は直線に運行していた。夏場には、子どもは葉木・破木間を泳いでいた。同じくダム湖のため流れがなく。容易に泳げた。水が流れているとき川は「川」ある。川では簡単に泳げない。必ず流される。ダム湖はちがった。流れることはなかった。



対岸は「葉木」。手前は「破木」

本誌4号7頁で、松本音一は「葉木」の地名由来の伝承を記している。「むかし、大木があり、その木の葉の散る様子を表した地名」とする伝承である。この伝承は「葉木」の文字に由来する。通説によれば、葉木と破木は、両者とも、「（水を）はく」に由来する地名で、葉木も破木も当て字である。

球磨川って、いいな

内田順子

ある日のことです。やさしい雨が降る坂本駅下りホームのベンチで9時15分着の吉松行き「いさぶろう1号」の到着を待っていました。北九州市小倉在住の友人、恵子さんが81歳のお母様と人吉まで旅行なさいました。途中、坂本駅に、僅か二分弱ですけれども停車しますので、久しぶりにお会いしたいと思い、早い時間から待ち、静かな時を過ごしていました。

駅のホームは私一人、雨音がホームに響きます。でも…もうひとつ私にとってとても大切にしている音、球磨川の流れが大きく私を包んでくれています。心穏やかになるひと時です。お二人と笑顔であいさつを交わすことができました。

列車を見送ったあと、線路を渡り駅舎を抜けて駅前に立ちます。再び川のとうとうとした流れに思わずにっこり。幸せです。なんだか、いい感じです。

結婚して17年間は、北九州で仕事をしながら金曜日の夜に坂本に帰ってきていました。JRを利用している時は夜9時過ぎの特急で坂本駅に着きます。あたりは闇の中シーンと静まり返りかえった中で、ざーざーとした音だけが聞こえます。都会育ちの私には、車の騒音しかイメージがありません。「もう九時過ぎなのに国道219号線はまだ車の量が多いんだなぁー」と思いながらバタバタと夫の迎えの車に乗り込んだものでした。そんな日々が続きました。球磨川の流れなどとは思いもよりませんでした。

ある日、ゆっくりと耳を傾けてみました。騒音とは違うことに気がつきました。「あぁー駅前の建物の向こうから聞こえてくるのはひょっとしたら昼間いつも眺める球磨川の流れ音…」。大自然のささやきです。流れは私のその時の気持ちや体調によってリズムが違います。優しく寄り添い励まし、迷っている時は背中を押し、気弱な心を弾き飛ばし、悲しみは「そんな時もあるよ」と声をかけて励ましてくれます。日ごろから球磨川沿いを歩いたりしていたらもっと早く身近に感じていたのに、残念でたまりません。



夜の坂本駅

人吉まで旅行をした恵子さん親子は、帰りは、SL人吉号でした。坂本駅に11分間停車します。その間、乗客は下車して、お弁当を買ったり写真撮影をしたり大賑わいで楽しそうです。平日の坂本駅では想像もできない多くの乗客です。私は、お二人にお茶を差し上げておもてなしをした後、駅前の赤い郵便ポストまで案内して、雄大な球磨川の流れを聞いていただきました。お互いに笑顔いっぱいで手を振って別れました。



おにぎり山

八代駅から坂本まで、川沿いを自家用車で走ります。赤い深水橋が見え始めると川向こうに、おにぎりの形をした美しい三角山が見えてきます。私は勝手に「おにぎり山」と命名して楽しんでいます。おにぎり山が近づくと川は大きく右手にカーブし目の前一面が緑濃い山々に包まれます。初めの頃は、カーブする道を運転することで精一杯で周囲を見渡す余裕もありませんでした。運転するときに、カーナビを見るとブルーラインの川が何度も蛇行し、おにぎり山ではおよそ１８０度曲がる感じです。特に夜、漆黒の闇の中で見るブルーラインは私の大のお気に入りになりました。結婚当初は、暗くて暗くて怖くて怖くて大変な思いをして運転していました


坂本駅近くの球磨川

悠久の時を刻む球磨川の流れはいつも私たちに幸せをもたらしてくれるとは限りません。大雨が降れば、球磨川は増水し、洪水被害の心配もあります。ゴウゴウと音を立て渦を巻き濁流が流木とともに八代海に流れていく球磨川、「自然に傲慢になってはいけない」と濁流をどきどきしながら眺め、改めて自然の怖さを強く感じ、気を引き締めます。

気候によっては、雨上がりの球磨川の水面から霧が立ち上がり白いベールに覆われます。じーっと眺めて「あぁーいいなぁ。あぁいいなぁ」と繰り返し叫びます。運転しながら忙しい毎日ですが、風光明媚な観光地を旅している気分でいっぱいです。

さぁー、今日も、とうとうと流れる球磨川、赤い橋、緑濃い山々に囲まれた自然の中、私もここ坂本の地で元気にすごします。

【うちだ・よりこ／八代市坂本町】

記憶の落ち穂

その⑦

絵と文／坂本福治



対馬丸出港の時

今から七十年余り前、沖縄の学童たちが疎開のため対馬丸に乗って鹿児島に向かい、米軍の魚雷を受けて沈没。多くの犠牲者を出した。今、沖縄市に住む私の友人の女性は、当時小学六年生で、同じ船に乗る予定で桟橋に並んで待っていた。小学校名は「越来」だった。「ごえく」と読む。ところが、沖縄のことをよく知らない日本の兵隊が案内係で、これを「こしき」と読んでしまった。「こしき小学校の方はこちらに並んで下さーい」と繰り返し呼ぶが、自分の小学校名を間違って呼ばれていることに、誰一人気がつかなかった。

「自分たちはどうして乗せてもらえないのだろう」と言いあっているうちに、対馬丸は出港した。一人の兵隊の、校名誤読が、一小学校の学童たちを守っていたのである。

【さかもと・ふくじ／画家、人吉市】



河口から上流まで、その駅を訪ねる

球磨川の駅・ものがたり

連載その❼ ―吉尾駅

熊本産業遺産研究会　松本晉一

吉尾（よしお）駅

昭和27年6月1日、海路駅と共にジーゼルカー専用駅として開業（葦北郡芦北町大字箙瀬４９５、図①）。ＳＬ列車に代わる気動車導入により短区間、短ホームの駅で停車可能となり、芦北地区の海路・吉尾の2駅が同時に開通。通学の便も良くなり、当時の吉尾小学校では盛大な祝賀会が行われた。

隣の海路駅からは３・２㎞、八代駅からは26・７㎞の地点に位置する。同じダム湖畔の海路駅同様、吉尾も駅舎はないが、ダムの嵩上げで平成20年３月には待合所を改築、海路駅より広くて頑丈な造りである（図②、図③）。



図① 吉尾駅正面



図② 海路方面



図③ 白石方面



図④ 吉尾川橋梁

吉尾名の由来は、この地は吉尾川の上流から田浦、芦北の八代海へとつながり、〝神は四海を渡り、四つの塩をもたらす〟の諺から四塩→〝よしお〟とされたとか。吉尾集落は駅から西方、１・５㎞にある。



図⑤ 案内板



図⑥ ホタル百選碑



図⑧ 町営バス停

駅の直ぐ上手の吉尾川には、鉄道開通時代（明治41年）のしっかりした石造橋台を持つ吉尾川橋梁（29・５m、図④）が架かり、その横に吉尾温泉（別名鶴の湯）の看板が目立つ（図⑤）。以前は「近くの吉尾温泉の客も多く、昔はＳＬと交互にジーゼル車が走っていた時代もあった」（浅野陸雄名誉駅長、資料「時代」と共に）と言う。温泉のすぐ脇〝くまもとホタルの里１００選〟（図⑥）の吉尾川河畔には立派な旧町立吉尾温泉病院（図⑦）や地元住民用の共同浴場もあり、地元芦北町営のふれあいツクールバスが県道２７２号（球磨田浦線）で役場のある佐敷町と白石駅間を無料で循環している（図⑧）。



図⑦ 旧吉尾温泉病院

吉尾温泉（鶴ノ湯温泉）

吉尾川の渓谷沿いには、鶴が湧水でその足を癒したとされる天然湯治宿、高野屋旅館、湧泉閣の2つの温泉宿があり（図⑨、⑩）、都会からの客が、時おり湯治に来るとのこと。後者には球磨川天狗橋下流の釣果、33㎝の尺鮎（昭和63年9月、図⑪）の見事な魚拓展示が見られる。ご主人の話では「昔は八代の早川商店が鮎の買付けに来ていたが、平成に入ってから次第に鮎が少なくなった」と言う。買物は移動販売車も来るが、昔は人吉で鯉の洗い、酢ダコなどを買っていたとのこと。若い人らは今も人吉、芦北などに買い出しに行くそうである。

温泉宿までは駅から徒歩10分、その奥の突き当たりには吉尾小学校が見える。

吉尾駅の列車運用は海路駅と同じく上下線各10本で、「いさぶろう・しんぺい号」と快速列車と「ＳＬ人吉号」は通過する。下流の瀬戸石ダムが出来るまでは、対岸の球磨村から高校生や買い物客が、渡し舟で渡って来ていたとのこと。昔はジーゼルの普通列車も5両編成の時代があり、60ｍのホームでは2両分がはみ出していた。



図⑨ 高野屋



図⑩ 湧泉閣



図⑪ 尺鮎の魚拓

沿線の眺望

この海路駅～吉尾駅間の特徴は、曲線の緩やかな山の麓を列車がゆっくりと走る。ダム湖のゆったりとした流れと相まって、運転手も眠気の出そうな区間だが、ここでの列車風景はロングショットのほど良い撮影ポイント（図⑫）でもある。中でも箙瀬（芦北）集落中段の二宮金次郎像横手からの眺めには興味深いものがある（図⑬）。



図⑫ 箙瀬、白石方面



図⑬ 箙瀬の眺望（福井弘氏撮影）

左岸沿いの線路は、この先、続けて第一、第二、第三の短い箙瀬トンネル（各60・4ｍ、37・2ｍ、140・8ｍ、外壁切石積、内壁煉瓦積）を抜けると、球磨川の流れと共に、右岸の神瀬付近で大きく白石駅方向へと西側にカーブする。右岸、球磨村の箙瀬地区は西南戦争の激戦地でもあり、各所からその当時の鉛弾が見つかるという。この流域は鎌瀬橋から神瀬橋まで、球磨川を横切る橋梁や渡し船もない区間だが、地域の球磨村コミュニティバス・川島大岩線が219号線沿いに瀬戸石駅と白石駅他を結んでいる。

〈参考資料〉
・前掲　各駅停車「熊本県」昭和58年
・前掲「くまもとの駅と港」昭和58年
・前掲「くまん　歩ＭＡＰ」
・「くまむらの歴史」球磨村教育委員会　平成2年3月　協和印刷
・平成21年3月27日人吉新聞「時代」と共に、肥薩線100周年・駅シリーズNo8吉尾駅
・ウイキペディア「吉尾駅」「吉尾温泉」

これからが旬の熊本のトマトを温かくいただきます。

トマトのレシピ３品

料理・菓子・ワイン・チーズ研究家
宮内 祥子

❶トマトのファルシ



材料（４人分）
- トマト小　４個
- 米　　2/3 合
- トマトの実と種、ヘタの部分の身を濾したもの　　４個分
- 玉ねぎ　30g（みじん切り）
- 冷凍の野菜ミックス　大さじ３
- 塩、胡椒　　適宜
- パルミジャーノ大匙１
- シュレッドチーズ　大匙４
- オリーブオイル　　大匙１

作り方

①トマトのヘタの部分を切り、穴をあけないように中身をくり抜く。
②①の身と種を裏ごしをする。
③ボールに米、玉ねぎ、冷凍の野菜ミックス、①の裏ごしたトマトのジュース、パルミジャーノを塩少々、黒胡椒適量を良く混ぜる。
④①のくり抜いた実の方に③を詰め、アルミホイルを上にかける。
⑤ 180 度のオーブンで 20 分焼く。

❷トマトの蒸し煮



材料（４人分）
- タイの頭とアラ１尾分（良く水で洗ってから水分をふき、軽く塩をし、ザルに並べる）
- ジャガイモ１個（一口大に切り、皮をむいて面取り）
- トマト（中）２個（種を取り除いたもの）
- 干し椎茸２枚（あらかじめ戻しておいたもの）
- スープ用冷凍野菜ミックス　１袋
- トマトジュース200ml
- 玉ねぎ1/4 個　（薄切り）
- オリーブオイル大匙１
- 丸餅　　４個

作り方

①鍋にオリーブオイルを入れて、タイ、玉ねぎ、スープ用冷凍野菜ミックス、ジャガイモ、干ししたけ、丸餅、トマトジュースを入れて、蓋をして、ゆっくりと弱火で蒸し煮をする。
②出来上がったら、皿に盛りつけ、オリーブオイルをかけて出来上がり。

❸トマトのタルト



材料（１枚）
- 冷凍のパイシート　１枚
- トマト　　１個（薄切り）
- アンチョビ　　１尾
- 玉ねぎ　　30g(薄切り）
- オリーブオイル適宜
- パルミジャーノ大匙１

作り方

①冷凍パイシートにオリーブオイルを塗り、玉ねぎの薄切りをのせる。
②①にトマトの薄切りをのせ、アンチョビをちぎって、ちらす。
③オリーブオイルをかけて、パルミジャーノをふって、オーブンに入れる。
④ 190 度のオーブンで 20 分焼く。

【みやうち・しょうこ。Jasmin's kitchen &魚食倶楽部代表、著書に「もっと知りたいチーズの本」「チーズを識る」世界文化社、「世界のチーズ」NHK など。東京都】



シリーズ ほいくのなかで描いた絵❼



絵を描いた人：秋山瑠姫（るき）ちゃん（6歳）

さざなみ保育園（人吉市）





幼保連携型認定こども園さざなみ保育園では「あかるくたくましい元気なこども、やさしさと思いやりをもつこども、意欲集中力をもつこども」を目指す子供像を掲げて日々、子ども達の就学前教育・保育に取り組んでいます。幼少時代に体験した事柄は子ども達の人生にとっても大きな影響を与えます。この時期にしっかり遊んで、しっかり学んでほしいものです。

社会福祉法人　西瀬福祉会「さざなみ保育園」
〒868-0077　熊本県人吉市下戸越町1632−1
定員：100 名　　☎ 0966-22-5519

建築みてある記

奈良木神社・観音堂をあるく

森山　学



写真① 右が社殿の拝殿。左が観音堂

奈良木神社・観音堂（八代市奈良木町、写真①）は、肥薩おれんじ鉄道・肥後高田駅から徒歩二十五分の所にある。

この境内は葉の形状をし、奈良木井手と奈良木脇街道が西側を沿っている（写真②）。

奈良木井手は球磨川下流の遥拝堰、中世以前の「杭瀬」に開く遥拝一番井樋から取水された用水である。この取水口の山手には、用水と農業の守護のため勧請されたとの説もある豊葦原神社（天平宝宇二年＝七五七＝創建）が建つ。

奈良木脇街道は、薩摩街道が八代・松江城下町を経由し干拓新地を通るようになる以前は、本街道であった。特に九州南朝最後の征西府が高田御所に設置された当時（元中七―九年＝一三九〇―九二）は、征西府と、古麓城下の名和顕興の館、菊池武朝の奉行所、古麓城の支城・平山城下の松岡長明の館を連結する重要路線であり、「殿道」とも呼ばれた。

征西府は、街道と用水をはさんで、奈良木神社・観音堂の南西に位置した。つまりこの境内自体が、征西府の鬼門守護を担っていた。



写真② 一の鳥居。左に奈良木井手と奈良木脇街道



写真③ 社殿の本殿正面にある「丸に違い鷹の羽紋」

そもそも「奈良木」の地名は、奈良木観音堂の本尊・木造十一面観音菩薩立像が「奈良地方より来りたる」に由来する。それは、征西府がはじめてこの地に上陸した正平二（一三四七）年のことか、懐良親王が隠退し仏教に帰依した天授元（一三七五）年のことか、征西将軍を懐良親王から継承した良成親王率いる征西府がこの地を最後の砦とした元中七（一三九〇）年のことか。あるいは征西府上陸に先駆け、高田御所の前身となる館を築いた中院義定（正平元年＝一三四六）の手によるものか。

いずれにしても奈良木神社・観音堂は征西府の重要施設であり、そのため征西府の鬼門に観音堂が創建され、さらにその鬼門に社殿が勧請されたと考えられてきた。

しかし境内の形状に着目するならば、井手と街道は、まるで境内を迂回しているようである。さらに境内内の社殿参道は、街道を境内内に延伸させた向きであり、拝殿がそれを正面に受けている。

御大典碑には神社の創建が寛弘二（一〇〇六）年とあるが、境内の形状からは、井手と街道の整備と同時期か、それ以前に、神社が創建されたと推測できよう。

さらに推理を続けてみる。奈良木神社は本来、「白山宮」であった。阿蘇神社に通じる「丸に違い鷹の羽紋」が本殿に飾られている（写真③）ことから見落としがちになるが、阿蘇神社・健磐龍命は、宝暦五（一七五五）年の大洪水後に災害を鎮めるため、

妙見宮・天御中主神とともに合祀された（棟札）のであって、白山神社の祭神・菊理姫命（白山大権現）こそ、古来の祭神である。つまり菊理姫命を水神として、用水の守護のために勧請したことが始まりだと言えよう。

一方、十一面観音菩薩は菊理姫命の本地仏である。つまり白山宮を鬼門の方位とし守護いただくように、征西府の前身となる館の位置を決め、その本地仏であるところの十一面観音菩薩を選択し同じ境内に安置した、と解釈したい。

この際、奈良木神社・観音堂の特徴的な境内風景が生まれる。観音堂は社殿への参道にわずかに食い込み、お堂の向きは社殿の向きから約33度振れている。この不思議な美しい風景は、どのようにつくられたのか。

その謎は観音堂の正面中央にある鳳凰の彫刻（写真④）が解いてくれる。この鳳凰、実は南方を守護する四神、朱雀である。確かに観音堂はほぼ正しく真南を向いている。社殿の向きが境内地や街道の形状によって決定されたとすれば、観音堂はそれとはまったく異なる、宗教的観念によって決定されたことを教えてくれる。南には観音菩薩の補陀落浄土があるからである。


写真④ 観音堂正面の朱雀

現実世界の観音堂の南方には山があり、その中腹に「堂床」と呼ばれる伝説の地がある。この堂床の松の木に木造十一面観音菩薩立像がかかっていたというのである。補陀落浄土の宗教的観念が、理解しやすいかたちで翻訳されて伝承されてきたのであろう。観音堂の前に立ち、堂床のはるか南方に浄土が広がっていると思うと、何ともありがたい気持ちにさせてくれる。

最後に冒険的な考察をしたい。社殿のうち本殿（写真⑤）は、棟札より、文久三（一八六三）年の建築である。


写真⑤ 本殿

その本殿の手挟（たばさみ）という部材に、鳥が彫られている（写真⑥）。鳥は松の木に止まっている。阿蘇神社の神紋「違い鷹の羽紋」に由来する「松に鷹」と解釈するのが通常であろう。しかしこの鳥、どう見ても鷹には見えない。


写真⑥ 本殿の手挟の「松に鷹」？

カラスである。

そこでカラスと仮定すれば、「松に鴉（からす）」と読み替えることができる。カラスは、日本サッカー代表チームのエンブレムともなっている八咫烏（やたがらす）。神武天皇の神武東征の際、天照大神が遣わし、大和国へと案内した三本足のカラスのことである。

皇統の正統性を争った南朝が、天照大神、神武天皇にまつわるカラスを、「東征」にあやかり「征西」の道案内にしたと考えられる。実際に八女の五條家が所蔵する征西府の戦陣の旗は「金烏の御旗」である。また懐良親王の父・後醍醐天皇は八咫烏神社を信仰したという。

「松に鴉」こそ、征西府が鬼門守護としたこの神社に残る南朝の確かな痕跡と捉えたい。しかしながら「松に鷹」を覆すには、彫刻をじっくりと点検して三本目の足でも見つけなければ。

【もりやま・まなぶ／高専教員、一級建築士、八代市】

みんなでつくるから楽しい

伝統の食材・かずら豆腐

亀田宏子



伝統食を守りつづけている「鮎帰会」の皆さん

25年ほど前、「なんでん、せんばん、あからん」と思っていました。なぜ、そういう気分になったのでしょうか。人には、そういうときって、あるんでしょうね。

それで「かずら豆腐」をつくりはじました。かずら豆腐は、カズラ（葛）でくくって下げても型くずれしないぐらい固めの豆腐です。歯ごたえがあり煮染めなどの具材になります。わたしの地元（八代市坂本町鮎帰）では普通の食材です。それで他の地域でもつくっているだろうと思っていましたけども、めずらしい豆腐のようです。五木村など、他の地域でも、以前は作っていたと聞きましたが、いまは作っていないようです。

むかしは、水塩のニガリを利用していたといいます。芦北の二見の水塩です。塩は二見から入手するとの決まりがありました。二見から運ぶ道を「塩の道」とよんでました。「塩の道」といっても、いまは、それを知らない人がほとんどです。ニガリも水塩のニガリから普通のニガリにかわりました。

ひとりで作っているわけではありません。「鮎帰会」というグループで、つくっています。毎日ではありません。金曜日につくっています。むかしは。たくさんのお豆腐屋さんがありました。わたしの地元には8軒ほどありました。行商されていた豆腐屋さんを思い出します。広い地域を徒歩で周り豆腐を売っていました。それだけ大豆が採れていたのでしょう。その後、豆腐屋さんはしだいに減っていき、豆腐屋を専業にする家はなくなりました。





かずら豆腐の刺身

昭和60年に、「坂本生活館」ができました。それを機会に、かずら豆腐のような伝統食を残そうということで、「鮎帰会」が発足しました。白石マツ子さんが創設者で、最初の会長さんです。白石さんには、本当に、お世話になりました。

「なんでん、せんば、あからん」と思って、「鮎帰会」に入ったのですが、ちょうど子育ての真っ最中でした、０―１５７が話題になった頃には、最高に不安でした。そのようなとき、白石さんは、いつも、「つかえん、つかえん」と話しかけてくださいました。「つかえん」は、使えないという意味ではなく、「心配しなくてもいい」という意味で、「どぎゃんかなる」ということです。

その後、自動車の運転ができるということで、いちばん若手の私が「鮎帰会」の会長になりました。金曜日の午前中に、かずら豆腐をつくって配達するのが日課になりました。

伝統食を残したいという使命感もありますけど、みんなで、一緒に、豆腐をつくることも楽しみです。販売して儲けたいという気持ちもあります。とにかく、週に一度、会員のみなさんと生活館に集まると、元気になります。そして、かずら豆腐は、いろいろな人に支えられてきましたので、それだけで、わたしには、とても貴重なものに思えます。

「鮎帰会」に入会した頃（平成3年4月）には、かずら豆腐のほかに、かずら豆腐の味噌漬け、麦味噌の3品は商品化されていました。かずら豆腐は、いろんな料理の食材にもなるようで、八代の中華料理店さんなどでも利用していただきました。そうこうするうちに、かずら豆腐は名前を知られるようになっていきました。うれしく思っています。

そんな、ある日のことです。「かずら豆腐は、うもうなか」との声が聞こえてきました。びっくりしました。他の業者さんが「かずら豆腐」という名前で豆腐を売っていたのでした。その豆腐を食べて「うもうなか」と思われたのでした。「鮎帰会」のマネをしている業者さんは、その後も出ましたが、途中で、やめてしまいました。いい大豆、ニガリを使っていねいにつくらないと、美味しい豆腐はできないのです。

かずら豆腐はいろいろな料理に利用できます。みなさんも、かずら豆腐を利用して、新しい料理をつくってみませんか。「道の駅さかもと」や「八代よかとこ物産館」においています。

【かめだ・ひろこ／八代市坂本町】



作業場となっている「坂本生活館」

柳人があじわう漱石俳句
—⑦—



いわさき楊子

お立ちやるかお立ちやれ新酒菊の花
（漱石28歳）

でました松山弁の句。松山出身で俳句の革新運動を興した正岡子規との交流の親密度がわかる。発音どおりに書くと「おたちゃるか、おたちゃれ…」となる。「出発なさるのですか、出発なさい…」という意味。熊本にくる前漱石は松山中学校教員だった。松山の漱石の下宿、愚陀仏庵（ぐだぶつあん）に52日間子規が居候したことで漱石は俳句に没頭した。ここが漱石の俳句出発点といえる。病の癒えた子規が帰京することになって、菊香る季節に新酒を酌み交わして送ったのだろう。



黄菊白菊酒中の天地貧ならず
（漱石28歳）

当時は、めでたいときには菊の花びらを杯に浮かべた菊酒が飲まれていた。天地とは宇宙、世界のこと。菊を浮かべた酒杯が豊かに満たされているようす。

寄りそえば薔薇も野菊も棘がある　楊子

うれしいさびしい特別賞もらう　楊子

【いわさき楊子（ようこ）／川柳誌「裸木（らぎ）」編集人、熊本市】

人吉観光案内人物語

住吉則昭

定吉が行く

— 7 —



© Keiichi Murakami

九州相良藩「吉組」大番頭　鳥飼 博



青井阿蘇神社で案内する定吉

復帰後の活動

平成24年の正月が過ぎ2月も半ばになろうとする頃、青井阿蘇神社に色白でやつれた男を見つけた。『退院したそん足でａｕに行って、携帯ばスマホに交換して来たっですよ。』と、男が言っている。隣には笑顔の福川宮司がおられた。男は、真新しいスマートフォンについて話している様子である。二人の笑い声が閑静な境内に響いた。男はFacebookの使用法について、宮司さんから手ほどきを受けているらしい。

男は身体の不調により入院していたのだろう。正月3が日に見た顔色は良くなかったし、その後約1ヶ月間男の顔を見ていなかった。『楼門立ち』の時に男の外見から推し量れたのは、顔色が悪いという事だけでそれ以外には何も無かった。胃でも痛くなって入院したのであろうと勝手に想像した。なぜなら、男のいつもの活動の様子を見ていて、それ程ストレスが掛かっている様には見えなかったからだ。

境内の二人を眺めていると、男は4年余りの間に宮司さんと随分親しくなっていた。人吉駅前広場の『カラクリ時計』の説明、トキメキ通りのごみ拾い、そして青井阿蘇神社の案内と、毎週末に欠かさず続けてきたお陰なのだろう。ストーカーを続けてきた私には、当然の成り行きだとも思えるのである。それほど男は真面目に週末の活動を継続してきた。今となっては、犯罪者扱いをしてきた自分を恥ずかしく思うし、男の変わらない活動に敬意を表す気持ちでいっぱいであった。

4月になると男のその活動に異変が起きた。今までは週末と祝祭日と決まっていたのに、ほぼ毎日同じ活動をするようになったのである。午前10時の『カラクリ時計』の説明から始まり、夕方になると青井阿蘇神社で一礼をして帰って行く。警察官のトキメキ通りでの職務質問以来、仕事は公務員と決め付けていたので定年退職を迎えたのだろうとも思ったが、定年退職を迎える年にはどうしても見えない位に若かった。



人吉駅前「カラクリ時計」

初めての対談

しばらくして男は、武者姿の男と共に人吉温泉観光協会から観光功労表彰を受けた。

表彰式には出席しなかったが、私はそれを縁として男と言葉を交わす様になった。実際に男に面すると、残念ながら私より若く見えた。笑顔も絶やさないが、話もなかなか終わらない。かと思うと、ぶっちょう面で黙りこくってしまう。何か気に障ったのかと心配していると、突然笑い出す変な男である。経験則を下に血液型はＯ型と予想していたが、どうも間違っていた様な気がしてならない。『住吉さんの血液型は何んですか?』と尋ねると、『おら、特殊大型ばい。』と答える始末で、埒が明かない。

『今年の初めには入院されていた様ですが。もう大丈夫なんですか?』と尋ねてみた。すると、『家内から健康診断ば受くるごと言われ続けとったけん、受けてみて良かったとばい。熊本の病院ば紹介されて、そこで打ち切ってもろてきたです。おら、運の強かってすたい。』と言う。癌を患った事についても運が良かったと言うのか。底抜けに明るい男である。

私にはもうひとつ、どうしても明らかにしておきたい事があったので質問した。

『失礼な事を聞きますが、住吉さんの

お仕事は公務員ですか？　もう定年退職なさったとですか？』

　すると、『人吉市の給食センター長ばしよったとばってん、病気もしたけん早期退職したとですたい。鳥飼さんな、俺っがごたっとが公務員じゃろかて思いなっどばってん、仕事は真面目にしとったとばい。』と笑って答えた。

　私もこれまで数年の男の行動から、真面目な人だということは充分理解していた。男の活動日と職務質問の内容から予測した男の職業が、公務員という予想は当たっていた。この男には私を惹きつける何かがある。今までに知り得た人の中に男の様な人はいなかった。この初対談を機に、時間がある時には男の案内を今までより近くで眺めることを増やし、会話の機会を多く設けるようにした。

　この初めての対談が、相良藩【吉組】の結成へと繋がっていく事となった。

「日本香道」公認？

　ある日、男の自転車には白い幟旗がたなびいていた。『人吉観光案内人』と黒墨で書いてある。どうしたのか聞いてみると、『宮司さんから貰ろたとバイ。宮司さんの直筆じゃって、良かろがなぁ!!』と、満面の笑みを浮かべて言った。お気に入りの幟旗は、旗の周囲が擦り切れるまで使い込み、現在は相良藩【吉組】事務所に大切に保管されている。

　人吉駅では、変な男に興味を持つ人も増え、錦町の写真家や人吉駅近くの理髪店主は日本香道のキャラクター【定吉】に似ていると言った。すると、その気になってしまった男は、日本香道にキャラクター【定吉】の使用許可申請を行い、メガネまでキャラクターと同じ丸メガネに変えてしまった。

　驚くことに日本香道から【線香屋の定吉】の使用許可が下りた。すると、人力車を引く車夫や周囲の仲間たちから愛用の自転車に【定吉号】という名札プレートを贈られた。その時の男の喜び様は、今までに見た事のないまるで子供の様な目の輝きであった。

　日本香道公認【線香屋の定吉】の誕生であった。

【とりかい・ひろし／人吉市】





© 山口啓二

「川に学ぶ」に参加して

森　明香

球磨川の豊かさを支えているのは球磨川の支流であり、その支流の支流です。豊かな川の再生は流域全域の問題です。今回は、人吉市を流れる球磨川の支流やその支流を見て歩きながら、『詩にうたわれた春の小川と何がどう違っているのか』「何のために川は変えられてしまったのか」などを探ってみたいと思います。



出水川（人吉市）

　案内に書かれていたこの文言に惹かれて、２０１６年５月29日（日）、「清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会」（手渡す会）主催の【第３回 川に学ぶ『春の小川を探る』】に、参加した。小雨が降る中、出水川、頭無川、福川、球磨川本流と鹿目川との合流点を巡見し、手渡す会の事務所・くまがわハウスで黒田弘行氏によるレクチャーを受けた。日本の小川が歴史的にどのような変遷をどのような背景のもと遂げてきたのか、ドイツにおける川の再生と日本における川の再生との違い、そうした違いが生まれた背景などを学んだ。以下は、その印象記である。

　出水川と頭無川という、球磨川の支流にあたる二つの小さな川を歩いた。初めて歩いたのに、いつかどこかで

見たことがあるような気がした。

思い出したのは、幼少期を過ごした父の実家付近を流れていた用水路のことだ。そこは散歩する犬の水飲み場であると同時に、子どもには遊び場にもなる、春の小川さながらの場所だった。のちに引っ越し、十数年ぶりに再訪したときには驚いた。用水路はコンクリート三面張となっていた。速い流れと垂直状の壁面の水路は、人や動物が近付くことを拒絶しているように見えた。



出水川を巡見する

出水川は、幼少期に出会った用水路が舗装される前の姿に似ていた。カワニナや小鮒らしき小魚の姿や藻が見られ、河床には砂地があり、家の石垣や川原が隙間を生み曲線を描いていた。

頭無川にもある種の懐かしさを覚えたが、それは、「昔の川はどうだったんだろう」と惜しむような感情だ。クレソンが茂りオキチモズクらしきものが見られ、階段や簡便な川床が設置された「親水公園」の様相を呈しながら、河床や壁面もコンクリートで固められていた。自然の川に見られるような、生き物が育つ上で大切な場（河床や壁面の凹凸等）には乏しいように感じた。

黒田弘行氏によるレクチャーでは、唱歌「春の小川」のモデルとされている東京の渋谷川の、過去と現在との比較を端緒として、春の小川とはどういうものであり、それが日本各地で絶滅危惧種となっている現状、そんな川の再生をめぐる国内外の事例について学んだ。

春の小川は、「生態系が保全されている小川」であり、「子どもたちが楽しく遊べる小川」でもある。川は自由な流れを保つ。生き物は多様で、自由に移動ができる。子どもたちはそんな生き物たちと触れ合える。

こうした小川は、都市では暗渠化されたり排水路にされたりして姿を消していった。田園地帯でも、農業の機械化に伴う田んぼの乾田化、暗渠排水による用水路の排水路への転化といった動きの中で姿を消した。

住民や市民による運動を後押しにそれまでの反省として、２０００年代頃から、日本各地で川の再生を標榜した河川整備が行われている。ただ、本当の意味で「川を再生」しているところは、どれくらいあるのだろう。あまり実例がないように思う。



「川博士」の黒田弘行さんからレクチャーを受ける

巡見とレクチャーを通して改めて思ったのは、日本では川が搾取され続けてきたということだ。経済的合理性を優先する社会にあっては、近代技術を濫用してでも自然を制御し、少ないコストで多くの利益を得ようという動機が強く作用する。結果、川の本来の役割を無視した管理の仕方がまかり通り、人びとの暮らしや生業も自然の営みとはかけ離れたものになってしまった。いわば川を破壊するかたちで発展してきたのだ。だから私たちは、本当の意味で豊かな「春の小川」の世界を取り戻す必要がある。

清流球磨川・川辺川を未来に手渡すべく奮闘してきた人たちの、地に足のついた学習会だと感じた。高知から球磨川流域までは何時間もかかるが参加した甲斐があった。10月23日には「第４回　川に学ぶ」が開催される。次回もぜひ参加したい。

【もり・さやか。大学教員、高知市】

好きです・八代トマト

立迫なぎさ



ビニールハウスの黄色い防蛾灯が蛍のように輝く夜景は、冬のトマト生産高日本一を誇る八代平野の秋の風物詩。これを見るとワクワクしてしまう私。大好きで毎日のように食べていても、十一月の出荷が待ち遠しいくらい「八代の冬トマト」は格別なのだ。20年ほど前、芦北からここ八代に引っ越して、本当に食の豊かな土地だと感じた。特にトマトの味と、品種の多さには驚き感激したものだ。

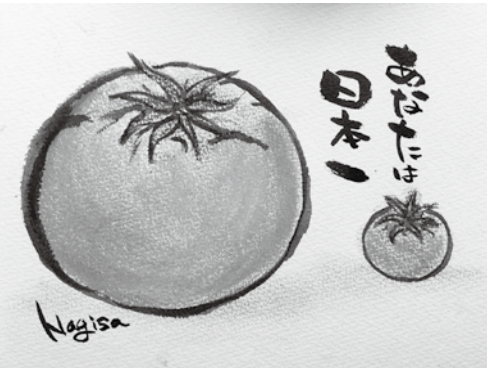
今年で第四回を迎えた「やつしろTOMATOフェスタ」。初回を企画した時、ゆるキャラ「とまピン」を作った。子どもたちに八代産のトマトのおいしさを知ってもらい、故郷に誇りを持ってほしいとの願いをこめて、トマトと栄養素のリコピンを合わせてネーミング。子どもたちの人気者になった。会場では地元でも貴重な「塩トマト」をはじめ、たくさんの品種や和洋中のトマト料理を販売した。開催前は、はたして人が集まるのかと不安の方が大きかったが、予想を上回る来場者数に売り切れ続出、嬉しい悲鳴が上がるほど。八代トマトのおいしさを再確認することとなり、とまピンの活躍も増えた。

このイベント企画を機に、生産者との交流も増え、栽培の苦労や喜びも知ることができた。子どもを育てるように愛情を注ぎ、種まきから収穫まですべて手作業でおこなうため、休日や年末年始もないという。収穫作業を体験させてもらったが、30分で腰が痛くなり弱音を吐いてしまった。

都会の熊本物産展に八代のトマトが並ぶと、飛ぶように売れてゆく。初日の購入者が、翌日にも買ってゆくこともたびたびだ。そんな人気のトマトを毎日のように、それも安価で食べることができて、しあわせだと痛感する。土づくりからこだわり、地力あふれる八代の恵みを食べると生命力・活力もわいてくるのだろう。栄養価も高くいろいろな効果が期待できる八代のトマトをみなさんも、ぜひ、どうぞ！



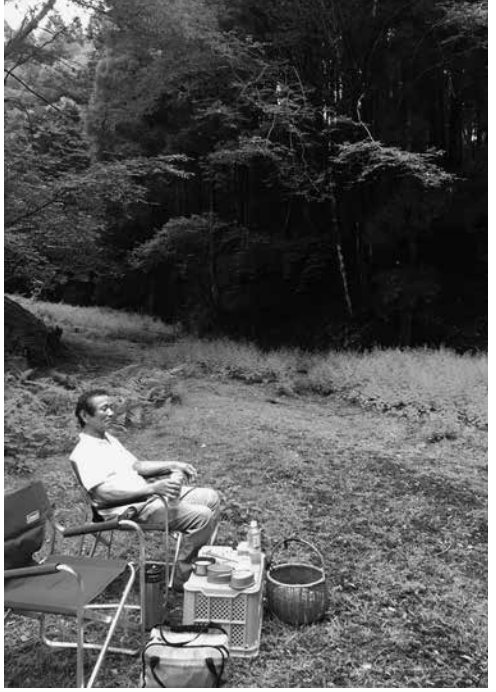
【たてさこ・なぎさ／八代市】



TAKEDA Eye Clinic
たけだ眼科クリニック
院　長 竹田 憲司
人吉市南泉田町39　☎23-3096
めがね・コンタクトレンズの
アイ ウェア槙（まき）
（たけだ眼科ビル内）☎0966-23-3097
デイサービスセンター
ケアプラン作成所いずみ
（居宅介護支援事業所）
いずみ
協力医療機関 たけだ眼科クリニック
人吉市南泉田町70番地の3 ☎0966-28-3307

とっておきの場所

桑原智子



私は昔から農家の軒先に下がる大根や干し柿を美しいなぁと思う子どもでした。

山上の小学校の窓から、春にはピンクのレンゲ畑が、秋には田んぼ一面が金色に変わる様など子どもながらにうっとりして眺めていたことを思い出します。

そんな私は、ご縁で農家に嫁ぎました。

いつのまにか感性が鈍くなっている自分に気付きますが、今の私はどんな風景に心をとめているのでしょうか？

わが家は、夫が有機農家を始めて27年になります。ここ球磨郡錦町で、10町ほどの田畑で米、麦、玉ねぎ、里芋などを主に栽培しています。

私たちの住んでいるところから、車で5分も走ると民家のない山に入ります。何カ所かお気に入りの場所があり、時間ができるとそこを散策します。頭痛などがあっても不思議と治るので自然界の懐の大きさをいつも思います。

たぶん1年の3分の1くらいは、山か渓流か田畑か庭でランチしています。

曲げわっぱの弁当箱にご飯をつめ、塩サバやきゅうりや昆布の糠漬けなどを持っていくだけの、その時々の有り合わせのご飯、農家飯です。楽しみにビールも1缶持参します。

そこで1時間半ほどゆっくりして、仕事に戻る毎日を送っています。わずか1時間でも2時間居たようにリフレッシュできるから不思議です。

特に森林の中では、いろんな感覚器官だけでなく、第六感が刺激を受ける感じがします。古(いにしえ)の記憶が戻ってくるような感覚さえ覚えます。春夏秋冬、何回、何十回同じ道を通っても飽くことはなく、心が喜ぶのです。

日本はフィンランドに次ぐ森林国ですが、ここ球磨郡も山林が9割、平地が1割だそうです。

山のてっぺん山頂から滝のように水が流れてくる様を見ると改めて自然の豊かさを知ります。

わが家の生活水は山水をひいて使っていますが、わが家だけでなく昔からここで暮らしていた人たち皆で管理しています。

また薪炭林（焚きもん山：薪や木炭の生産を目的とする森林）と呼ばれる山には、町民であれば、焚きものに使う薪を町の山から切り出して良い時期があります。年明けて早々1年の始まりの仕事です。わが家も薪ストーブや囲炉裏やお風呂に使う分を1年間分切り出します。1ヶ月くらいかかりますが、仕事というより、男の楽しみに見えます。村の共同体としての暮らしがあった頃を垣間見る気がするので大事にしたいことのひとつです。



子どもたちはこういう暮らしを受け入れ、継いでくれるでしょうか？

人は自然の一部であるはずなのにいつの間にか自然との距離を置くようになりました。

自分も含めてみんなが「自然ともっと仲良くなる」と良いと思います。そこに暮らしていくことの原点が見えてくるように思うのです。少し前までの私たちの暮らしは、太陽や月と共にあり、自然に寄り添い風土に息づいたものでした。自然のそういう秩序を理解し、宇宙ともつながっていた暮らしがそこにはあったように思います。

そういうことを大事にしていきたい。仕事しながらそんなことを考えてます。

【くわはら・ともこ／農業、球磨郡錦町】

多良木町奥野・中山観音讃歌

―日本遺産・相良33観音巡礼のベストワン―

外山胃腸病院　岐部明廣

わたしは今年の秋のお彼岸は9月19日、22日、24日と3日間も多良木町奥野の第28番札所の中山観音巡礼をした。いつみても惚れ惚れするすばらしい観音さまだ。参道もいいし、ここはまさに聖地だ。

19日の観音巡礼の最初に中山観音を訪れると、ある中年の男性が「岐部先生ですか?」声をかけられた。その男性は朝日新聞の記者という。

「先生の書かれた『日本遺産・相良33観音巡礼』のベストテンの1位が中山観音というので、ここに来ました」と話かけられた。朝日新聞の記者の質問に私は、中山観音のすばらしさをうれしい気持ちで得意に説明した。説明する必要もなく見れば一目瞭然なのに。

お接待をされる多良木町奥野の人（今では8軒しかないが）の話によれば、いまだ多良木町指定文化財の中山観音をようやく熊本県指定文化財に申請したらしい。県指定が取れれば次に国指定重要文化財に申請したいといわれた。国宝級の中山観音がいまだ県指定文化財にも指定されていないことに非常に驚いた。はやく国指定重要文化財に指定されることを切に願う。



中山観音（筆者撮影）

22日は中山観音の駐車場で多良木町久米の伏間臼太鼓踊りを鑑賞した。わたしが出演した9月17日ＲＫＫラジオの「球磨川スピリット」の放送で、相良33観音巡礼のベストテンの第一位が中山観音と聞いて来たという参拝者に会った。わたしはなんとなく嬉しかった。

24日に福岡からきた息子の嫁を連れて、3度目の参拝をすると、お接待のご婦人が『岐部さんという人が相良33観音巡礼でここが一番と書いた本のお蔭で今年は参拝者が多かった』とわたしが張本人の岐部とは気づかずに言われた。それを聞いた息子の嫁は笑った。

本を書いた意義があったとわたしは心底うれしかった。

最後に『物語はひとつだけではない』というタイトルで「日本遺産・相良33観音巡礼」の書評を書かれた水俣市の上村和代さんにお礼をいいたい。彼女がわたしの本を深く読み込まれているのには本当に驚いた。本当に感心した。

来年のお彼岸には何回、中山観音をご参拝するのかなァ。

【きべ・あきひろ／人吉市】

『相良三十三観音巡礼』私話

岐部先生のご利益？

上村和代

今年の相良三十三観音秋のご開帳は、台風の影響であいにくのスタートとなりましたが、例年通り多くの巡礼者で賑わったようです。

相良三十三観音巡りといえば、岐部明廣先生の『相良三十三観音巡礼』。ご縁があって書評を書かせていただきました。

読んでいて個人的にびっくりしたことがありました。相良家第二十代長毎公にお供して朝鮮出兵にも同行するなど、相良家の繁栄に貢献した真言宗願成寺十三世「勢辰」。のちに僧正にまでなる偉いお坊さんが、若い頃修行したのが讃岐聖通寺だというのです。私の実家のある坂出市の隣町、宇多津町にあるお寺です。

瀬戸大橋を渡って四国に入る直前、真正面に見える山を聖通寺山（しょうつうじやま）といいます。電車は山の西側、車は東側を行きます。山の西側の麓にあるのが「壷平山聖通寺」。電車の車窓からだとチラリと見えるかもしれません。

まさか願成寺のお坊さんが、香川の小さな町で修行していたとは思いもしませんでした。願成寺さんへは、「いつでも行けるから」と油断して、お参りしたことがなかったのです。それに、岐部先生の本を読んでいなければ、たとえお参りしていても知らずにいたと思います。また、改めて聖通寺さんについても調べてみると、天平時代に行基菩薩が開いたのち、京都の醍醐寺を開いた聖宝理源大師によって平安時代に再興された由緒正しいお寺だと知りました。四国八十八か所の札所ではないので、特に意識したこともなかったのですが、由緒を知って人吉からわざわざ修行に行くのも納得です。


相良家の菩提寺である願成寺（人吉市）


香川県綾歌郡宇多津町にある「壷平山聖通寺」

地元のことなのに、まったく知らなかったのもショックでした。「相良三十三観音巡礼」の40ページに「歴史は縁の連鎖だ。ここに多くの物語が生まれる。だから面白い。」という一文がありますが、私にとっては、まさにご縁が生んだ物語。

今度、人吉へ行ったらご縁に感謝しつつ願成寺へお参りし、帰省した時には聖通寺へもお参りしようと思います。

【うえむら・かずよ／水俣市】

第9回「うたせ船で水俣病を学ぶ講座」に参加して

松本晉一

9月24日、今回、初めてこの講座へ人吉から一人で参加。8時半の集合に道を間違え、水俣廻りで会場の芦北町・女島へと到着。8時半の集合に7分ばかり遅れ会場へと急ぐ。

講座の最初は中学生の3人の作文発表で開始。3名が「水俣病を通して、水俣病からの学び」など、真面目なテーマと視点でのお話。中学生にしては少々堅苦しい感じがあり、もっと興味あるテーマを与えてあげれば、自由な発想の作文発表になったのではと思った。

次の宮本勝彬元市長の帰朝講演「誠実に生きる」は興味深く聞いた。特に最初の教職時代の経験、教師ではなく「先生」（教育を与えるではなく、その子に明かりをともす）としてのあり方、どう子どもたちを引き付けるかという点。また、水俣病の差別発言に対する対応法（切り返す力を持つこと）。さらには水俣市長になられて大企業による産廃施設との戦いの切り抜け方の大変さを、「だいじょうぶ、心配するな、何とかなる」という言行一致の精神で貫かれたこと。環境でメシを食うための大変さ、街づくりの基盤の大切さなどを教えていただいた（図①）。



図① 基調講演（宮本氏）

その後、場所を計石漁港、芦北漁協前の〝うたせ船〟へと移動。参加者全員（約100名）は記念写真の後11時前に8隻の船に分乗、水俣沖に向けて出発した。

実は、今日の私個人の参加のねらいは、この八代海で、まだまだ元気に活躍している「うたせ船」を産業遺産的視点で見てみることであった。乗船したのは第5班の漁栄丸（田平正彦ご夫妻）の船である。この船はこの計石の船の中でも最長老、長さ15m、幅3・5m、重さは10トン強の木

造船とのこと（図②）。

ご夫婦の和やかな出航合図の中、ディーゼル音が響き、後ろの錨で船を逆転させながら隊列を組んで出航。途中、同乗の参加者は中央部で、ゆっくりと海を眺めておられたが、私だけは田平船長にうたせ船について、色々なお話をお聞きした。

例えば、出航のタイミングは、ハエ（南）の風で干潮の時と、北風で満潮の前の30分前であること。うたせ船の昔の稼ぎの良さでは「漁には1日に2回出ていた。だから、漁は月に30回～40回になった。たった1回の漁でも、当時の給料取りの何倍もの金になった」など。だが、最近は漁法や漁網もよくなり、気象条件の違いもあってか、漁も少なくなりつつあるとのこと。また、そのことで後継者も少なく、さらには船大工さんもいないので、あと10年も経てば、うたせ船は現在の18隻から半分になるのではと気にしておられた。



図② 漁栄丸（田平正彦船長夫妻）



図③ 船上での手料理

水俣港までの道すがら、この個人的な取材に時間を取られ、船上での次のテーマである「船長による講話、質疑応答」が出来なくなり、同船の皆様方にはご迷惑をお掛けしたのではと危惧した次第。

水俣の街を湾外から見学後、帰路にはうたせの網打ちがあった。皆さんの歓声のなか、うたせの綺麗な帆が拡げられ、次いで網が海へと入れられる。網を揚げるまで、船長奥様の手料理で弁当の時間となる。生きエビを始め、美味しい魚料理を皆さんと共に堪能させて頂く（図③）。

ちょっと残念だったのは、もう少し水俣湾内奥に入って街の様子が見たかったのと、昼食の時に参加者同士、互いの紹介や対話が少なく、食事のあいだ、黙々と「美味しい」だけのお昼ご飯だったことである。出来れば、どなたか世話役をお願いして司会進行があれば、講座のテーマ性とこの機会を充分に活かすことが出来たのでは、と感じたのは少々、思いの入れすぎか。



図④ うたせ船の現状



図⑤ 現在の百間排水溝

しかし、こちらは当初の目的であるうたせ船について、船長さんから50年前から近況まで、その変遷を思ったよりしっかりと取材が出来た。ついでにうたせ船の現状を取材、船大工さんが居らず、計石港にある補修も出来ない残念な船の姿を写真に収める（図④）。

さらに、この初めての機会を利用して、帰りには水俣エコパークにある情報センター・資料館・熊本県環境センターを訪れ、今回の講座の内容と意義を補足。次には百間排水口、反対側の排水口、丸山水門の現況を見てから帰路についた（図⑤）。

お天気も良く、この機会を頂いた芦北町の皆様方には、厚く御礼を申し上げたい。次回の第10回には、また別な観点からこの講座と行事に参加出来ればと思っている。

【まつもと・しんいち／熊本産業遺産研究会、人吉市】

「明治熊本地震」と金田楢太郎

木﨑康弘

1　はじめに

１８８９（明治22）年８月６日に内閣官報局から発行された『官報　第千八百三十一号』の「○辞令」の中に、次のような記載があった。

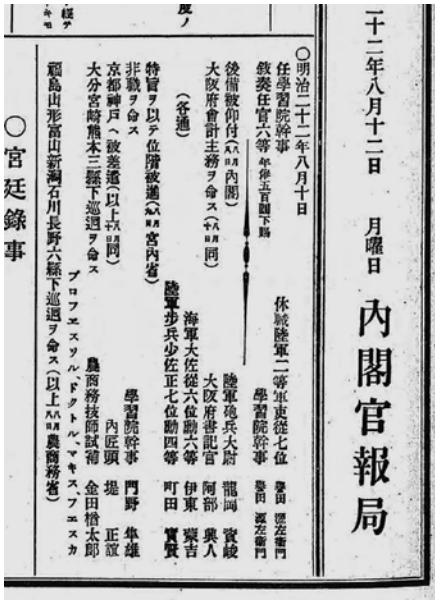
「農商務技師試補ヲ命ス年俸金六百円下賜　金田楢太郎／地質局勤務ヲ命ス（以上八月三日農商務省）

農商務技師試補　金田楢太郎」

さらに、同年８月１２日の『官報　第千八百三十六号』の「○叙任及辞令」には、それに続く記事があった。

「大分宮崎熊本三県下巡廻ヲ命ス　農商務技師試補　金田楢太郎」

１８８９（明治22）年８月６日、12日といえば、明治熊本地震が勃発して、熊本市やその周辺が大混乱の最中。１日に帝国大学理科大学（後の東京帝国大学理科大学、現、東京大学理学部）の教授小藤文次郎、８日に同大学の物理学講師長岡半太郎、11日に同大学の教授関谷清景が次々と来着し、現地での調査・観測と混乱の沈静化などに当たっていた頃だった。



二十二年八月十二日　月曜日　内閣官報局

○明治二十二年八月十日

任學習院幹事　休職陸軍二等軍吏従七位　學習院幹事　學習院幹事

叙奏任官六等　年俸五百圓下賜

（各通）

特旨ヲ以テ位階被進（八月十日）

非職ヲ命ス　陸軍砲兵大尉　龍岡資綏

京都神戸へ被差遣（以上八月十日）　大阪府會計主務ヲ命ス（八月十日）　阿部興人

大分宮崎熊本三縣下巡廻ヲ命ス　陸軍歩兵少佐正七位勲四等　伊東祐吉

海軍大佐従六位勲六等　町田實賢

學習院幹事　門野幾雄

内匠頭　堤正誼

農商務技師試補　金田楢太郎

プロフエツソル（ドクトル）マキス、フエスカ

願ノ通

○宮廷錄事

願島由形富山新潟石川長野六縣下巡廻ヲ命ス（以上八月十日農商務省）

出張辞令

そして、これらの辞令に対応する記事が、『熊本明治震災日記』（水島１８８９）の「○八月十五日雨　正午寒暖計八十四度　旧七月十九日」にあった。

「内務省技師試補理学士金田楢太郎氏地質調査の為め且今回当県地震実査をも兼ね本日長崎より到着せられたり」

そんな金田とは、どのような生い立ちで、どんな調査をし、どう取りまとめた人物だろうか。今回は、それがテーマだ。

2　金田楢太郎

六稜同窓会（大阪府立北野高等学校同窓会）ホームページの「歴代校長」によれば、金田は、１８６９（明治２）年に堺県（現、大阪府堺市堺区）で生まれた。帝国大学理科大学地質学科に進み、１８８９（明治22）年に卒業。卒業後は、既述のように、８月３日付けで農商務省の技師試補を命ぜられ、地質局の勤務となった。その後、１８９０（明治23）年から１８９２（明治25）年まで大学院に在籍。小藤の指導を受け、地質学の研究を深めたのだった。



金田楢太郎

１８９３（明治26）年から１８９６（明治29）年にかけての第一高等中学校（後の第一高等学校）時代には、地理学の研究にまい進。「地理学の分科」や「経済地理に就て」、「経済地理学一班」、「日本人口論」など、数多くの論文が『地学雑誌』に載った（日本地学史編纂委員会１９９７）。

その後、大分県尋常中学校（現、大分県立大分上野丘高等学校）の教諭、大分の府内城南櫓にあった大分県大分測候所（現、大分地方気象台）の所長事務取扱、奈良県尋常中学校（現、奈良県立郡山高等学校）の教諭・校長事務取扱などを歴任した。因みに、１８９８（明治31）年４月５日付けの『官報　第四千四百二十五号』には、「年俸九百六十円下賜（三月三十一日奈良県）　奈良県尋常中学校教諭　金田楢太郎」と記載があったが、これは校長事務取扱に伴った措置ではなかったろうか。

次は、島根県第一中学校（現、島根県立松江北高等学校）に校長としての赴任だろうか、１８９９（明治32）年10月25日付けの『官報　第四千八百九十六号』には、「年俸千二百円下賜（十月九日島根県）　島根県第一中学校長　金田楢太郎」との記載。さらに、１９０１（明治34）年12月28日付けの『官報　第五千五百四十八号』で、「年俸千二百円下賜（十二月二日三重県）　三重県立第一中学校長」とあり、12月２日付けでの三重県第

一中学校（現、三重県立津高等学校）の校長就任が窺えた。そして、１９０２（明治35）年10月６日付けの『官報　第五千七百七十八号』に、「年俸千四百円下賜（九月二十七日大阪府）　大阪府立北野中学校長　金田楢太郎」とあり、大阪府立北野中学校（現、大阪府立北野高等学校）への着任。最後は、2月22日付けの現役引退で、１９１３（大正2）年3月27日付けの『官報　百九十五号』には「二級俸下賜　大阪府立北野中学校　金田楢太郎／休職を命ス（以上二月二十二日大阪府）　大阪府立北野中学校　金田楢太郎」とあった。

3　明治熊本地震の調査と報告

１８８９（明治22）年7月に大学を卒業した金田は、農商務省の技師試補として、地質局に勤務することになった。それは「豊前、豊後、日向地方の地質予察調査」のためで、10日に九州に向けて出発した（地学会事務所１８８９）。おそらく神戸までは鉄路を使い、神戸から長崎行きの船に乗り換えたはず。そして、「本日長崎より到着せられたり」（水島１８８９）とあったように、15日、長崎から船便で、三角港（現、三角西港）に降り立ったのだった。

『熊本明治震災日記』の中には肩書が「内務省技師試補」とあったが、辞令は農商務省の「農商務技師試補」。この齟齬は、地質局の所属先移転が原因してのことだろう。農商務省地質局は、もともと１８７８（明治11）年に設置された内務省地理局地質課が前身。１８８１（明治14）年に内務省から農商務省が独立すると、それに伴い地理局地質課も異動。１８８２（明治15）年2月13日には、地質課が廃止されて、地質調査所が創立。さらに１８８５（明治18）年には地質調査所が地質局と呼ばれた。こうした目まぐるしい組織改編の結果、誤記が生じたものだろう。

金田の記事が次に現れたのは、「〇八月一六日曇　正午寒暖計八十七度　旧七月二十日」だった。

「昨十五日着熊ありし金田理学士には本日より金峰へ登山夫より西山地方嶽村野出村等を実査されたり」

そして、間を空けて、「〇八月廿一日晴　正午計九十二度　旧七月廿五日」に記事があった。

「本月十五日着熊ありし金田理学士は大分熊本宮崎三県下へ出張を命せられたるにより当地震災の調査を了へ傍ら熊本近傍地質の調べも粗結了せしにより本日より阿蘇地方へ向け出発せられ同地より宮崎県へ出張せらるゝよし」

15日に来熊して、16日から調査を始め、20日に終了。都合5日間の調査では、「西山地方嶽村野出村等を実査」の他に、「当地震災の調査を了へ傍ら熊本近傍地質の調べ」も行った。ところが、その間の具体的な調査地や内容は、『熊本明治震災日記』の本文中には記されていなかった。これでは具体的な調査や成果が見えてこない。そうした中、金田が『海西日報』に寄稿し、『熊本明治震災日記』の附録として転載された「熊本地震調査報告書」に、関連しそうな記事があった。そこで、それを頼りに、調査の実際を見ていこう。

「今回地震震動の二の嶽近傍に激烈にして其の破壊力の広大なりしことは著るしきものにして堅硬なる巌石地盤の崩壊したるなり」

金峰山塊の、熊ノ岳（６８５ｍ）とも呼ばれる二ノ岳附近の震動が激しかったという。その破壊力は、硬い地盤を崩壊したほどで、「花園村西字馬の路と称する畑地近傍の懸崖」、「船津百貫石間海瀬の絶壁」を例として挙げていた。

「重量数万斤なる大盤石の一旦飛揚して居を遷したるあり」

また、数十万トンにも及びそうな巨岩が飛び上がって、場所を移動したという。事例として、「野出村本村の西に俗に太鼓石と称する大巌の座を南方に転する九寸米に及ぶものあり」だ。

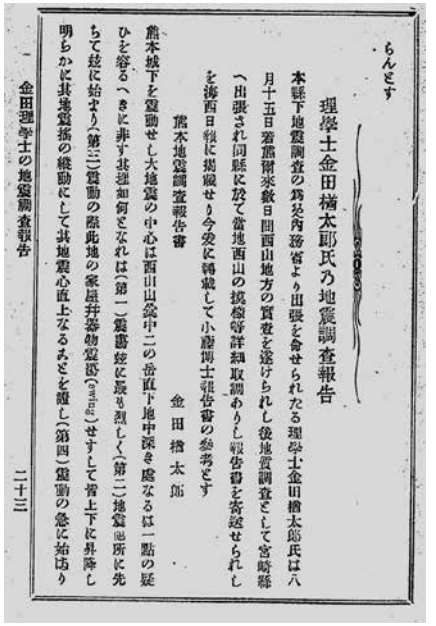
「西山地方の意外に平穏にして人心の動揺せさりし」

金峰山塊中は平穏で、住民はあまり動揺していなかったと述べた行だ。流石に地質学者の金田だ、その原因を分析して、その結果を列記した。

まず、地盤が強硬な岩であったことを挙げた。次に、住民や家畜が少なかったことも関係したと述べた。そしてそれに伴って、「崩崖倒屋」などの災害が少なかったとも指摘。「尚ほ重大なる」は、性質が緻密で硬い岩盤だったことで、絶壁や家屋が揺れにくかったとも分析したのだった。

そして、「余今回熊本四近西山地方を巡廻し（官用は専ら地質調査にあれ共）」、結論として、次のような分析結果を下した。

「今般の熊本地震は其実際震域の広濶なるに関せす其震被の直正進路（固有震域）は意外に狭隘にして紐帯のことときものにして其の実際震域の広濶なるは


理學士金田楢太郎氏の地震調査報告

本縣下地震調査の爲め内務省より出張を命せられたる理學士金田楢太郎氏は八月十五日着熊府來數日間西山地方の實査を遂げられし後地震調査として宮崎縣へ出張され同縣に於て當地西山の搖動等詳細取調ありし報告書を寄越せられしを海西日報に掲載せり今爰に轉載して小藤博士報告書の參考とす

金田楢太郎

熊本地震調査報告書

熊本城下を震動せし大地震の中心は西山山麓中二の岳直下地中深き處なるは一點の疑ひを容るゝに非ず其理如何となれは（第一）震動が近處に於て最も烈しく（第二）地震地所に先ちて起に始より（第三）震動の際此地の家屋并器物震盪（ゆれ）せずして皆上下に昇降し明らかに其地震源の緩動にして其地震心直上なるを證し（第四）震動の急に始まり

「熊本地震調査報告書」

地盤の伸縮生（elasticity）に基つき震派の反射及ひ屈曲等に依り直正固有なる狭帯より延ひて広大なる面積を占領するに至りしものに非さる歟否」

今回の震域は広域だが、本来は意外に狭く、紐帯のようなものだという。それが震動の波が反射や屈曲をしたりして、本来よりも広い範囲が揺れたのではあるまいか、との推測だった。

「今西山々彙に就きて崩塘破屋或ひは盤巌飛転のごとき震蕩力の猛烈なりしことを指示する諸点を探索し地図を繙き其諸点を印記結付するに二の嶽近傍に相結繃する二線を獲たり、謂ふに斯の二線は地震々波進路帯の存在を明示するものにして今般地震々波の帯状に進行揺蕩せしことを示すものに非さるなき歟否」

金峰山塊を対象に、「崩塘破屋或ひは盤巌飛転のごとき震蕩力の猛烈」な諸点を探し、地図に落としたら、二ノ嶽近傍で交わる二線があり、震動波の進路帯が二つあったとの推測もした。

そしてそれぞれのルートを次のように推定した。

「右二線の一は西船津より河内谿に沿ひ二の嶽を衝き平山越を経て辰崩より戸坂に至り花岡山の北東麓を通り熊本城内より西西北に向ふ而して第二線は野出より面の木を経て二の嶽直下に第一線と相結繃し尚ほ北北西、南南東に向ひ高橋を過ぎて川尻に及ぶ」

この二つ線の交わりが「今回地震の震心（centre）直項にして二の嶽の震央（epicentrum）たるは疑を容るべきに非ず」との結論となった。

なお、「熊本地震調査報告書」は、そのまま１８８９（明治22）年９月25日に発行された『地学雑誌』に「●熊本地震調査報告」（金田１８８９ａ）という題名で掲載された。

4　おわりに

こうした調査を終え、金田が阿蘇に向けて出発したのは21日だった。そして、本来の公務としての地質調査を阿蘇で終えて、さらに公務を続けるために、次の調査地の宮崎県を目指したのだった。

１８８９（明治22）年11月26日に内閣官報局から発行された『官報　第千九百二十四号』の「○叙任及辞令」の中に、次のような記載があった。

「農商務技師試補ヲ免ス（十一月二十五日農商務省）

農商務技師試補　金田楢太郎」

金田の職を免ずる辞令だった。これは、「大分宮崎熊本三県下巡廻ヲ命ス」の公務が終了しての措置ではなかったか。そうなると、８月21日に阿蘇に向った調査旅行は、宮崎県と大分県を巡りながら11月まで続けられたのだろう。

その間の足取りは、調査記録や調査報告などが無いため明らかでない。そんな中で興味深い文献が1本あった。それは、東京人類学会雑誌に金田が寄せた「○肥後五ヶ荘人民身体測定表」（金田１８８９ｂ）だった。その雑誌の発行月は、10月。そうすると、９月のある期間には五家荘に入ったことになる。しかも、その中に「日向国西臼杵郡奈須郷人民身体測定表」も収められており、おそらく、宮崎県側からの五家荘入りだったのだろう。


十二年十一月二十六日　火曜日　内閣官報局

特旨ヲ以テ位階被進　従二位　伊達　宗紀

奏任待遇（以上十一月二日宮内省）　大膳職事務補助　櫻井　安定

東海道竝九州地方巡廻ヲ命ス　内務書記官　佐和　正

中國竝四國地方巡廻ヲ命ス（以上十一月二日内務省）　内務書記官　久保田貫一

賜一等給（十一月二日陸軍省）　参事官　仙波　穉艶

農商務技師試補ヲ免ス（十一月二日農商務省）　農商務技師試補　金田楢太郎

東京郵便電信局事務官　深尾　吉兵

仙臺宮江津前橋桐生水戸（出張ヲ命ス（十一月二日遞信省）

○宮廷錄事

免職辞令

【引用参考文献】

金田楢太郎　１８８９ａ　「●熊本地震調査報告」『地学雑誌』１―９　地学会

金田楢太郎　１８８９ｂ　「○肥後五ヶ荘人民身体測定表」『東京人類学会雑誌』５―44　東京人類学会

地学会事務所　１８８９　「●地学会記事　会員ノ往復」『地学雑誌』１―８

日本地学史編纂委員会　１９９７　「日本地学の形成（明治25～大正12年）〈その3〉―「日本地学史」稿抄―」『地学雑誌』１０６―３　東京地学協会

水島貫之　１８８９　『熊本明治震災日記』活版社

ノーベル賞候補として注目された人吉市出身の―

松村保広君の近況報告

永田満徳



「引用栄誉賞」を受賞した松村君

松村保広君がノーベル化学賞の候補者として俄かに注目されることになった。米情報会社トムソン・ロイターが独自に予想したノーベル賞の有力候補者に贈る「引用栄誉賞」を保広君が受賞したからである。残念ながら、今回はノーベル賞を受賞できなかったけれど、その有力候補に挙げられたことだけでも、地震に被災した熊本に力を与えるものである。

保広君は高分子薬剤が選択的にがん局所に留まりやすいEPR効果を発見し、その発見に続いて、がん間質ターゲティング療法を開発し、新薬開発にも多大な貢献をしている。私は保広君と中・高の同窓であるよしみで保広君の貢献を称え、ここに紹介する。

松村保広君は人吉市温泉町生まれ。61歳。中原小学校、人吉第二中学校、人吉高等学校を卒業する。

【松村保広君　略歴】

昭和56年（1981）3月　熊本大学医学部卒業、第一外科入局
その後に医学博士号取得
昭和63年（1988）8月　文部教官熊本大学医学部助手
平成元年（1989）8月　米国マウントサイナイ医科大腫瘍内科留学
平成2年（1990）9月　英国オックスフォード大学ナフィールド病理
平成6年（1994）9月　国立がんセンター中央病院第一外来部内科医員
平成14年（2002）4月　国立がんセンター研究所支所がん治療開発部部長
平成27年（2015）4月　独立行政法人国立がん研究センター先端医療開発センター　新薬開発分野長

さらに、私の複数の質問に対する保広君の返事を纏めて書くことで、本人の弁としたい。

政治家志望だったけれども、高校時代に生徒会長を経験して話が苦手であったために断念し、医者という技術職にもなれば食いっぱぐれがないくらいの薄っぺらな気持ちで、医学部に進学する。しかし、既存の医療ではなく、新しい医療の創生をして、少しでも「自分で作った医薬」で人類に貢献したいという衝動に駆られて、医学の研究職に就く。

研究活動の指針ともいうべきは、(1)流行にのらない、(2)データと喧嘩しない、(3)「木を見て森を見ず」とならないように心がけるというものである。

EPR効果の発見を機に、抗体医薬の重要性を認識し、新しい抗体医薬、新しい概念の抗体医薬を作製する。まさに研究から開発にステップアップし、今から実用化へ向け開始しようとしているところである。抗体医薬が患者の役に立つことを証明するまで、研究開発に全力を尽くしたい。

【ながた・みつのり／熊本市】



人吉市温泉町にある松村保広君の実家の近くには相良三十三観音の第八番札所「湯の元観音堂」がある。

球磨の珠玉

伊勢戸 明著（企画＝人吉球磨総合研究会）

くま春秋

――人吉・球磨を見つめつづけて



カバー写真／山口啓二

長年にわたり地方紙の記者として政治、文化、教育など、幅広い分野から情報を発信した著者の珠玉のコラム集。14年間「週刊ひとよし」の巻頭を飾ったコラム370本を精選した一冊。

■A5判／上製／400頁
■定価2,100円（税込）
送料200円

発行・人吉中央出版社
発売・風行社

人吉中央出版社

人吉藩の地震④

二、安政元（1854）年の大地震②

尾方保之

㈠、幕府への地震の報告

十一月五日と七日の大地震について、江戸の藩主長福（志摩守）と幕府へ報告しなければならない。十一月十三日、徒士の赤坂傳七と菜原勇左衛門が書状をもって人吉を出発、十二月十日江戸へ到着した。二日後の十二日、藩主長福は幕府の御用番松平和泉守に御届書を提出した。「御在所大地震一件」（「相良文書」）によると次のようになっている（読み下し文）

御用番

松平和泉守様

私領肥後国人吉去月五日申下刻、同七日辰下刻古来よりこれ無き大地震にて住居向始め城内外櫓塀門等大破に及び候場所もこれ有り、且城山所々崩、地裂け申し候。其の外侍屋敷在町共倒家損所等夥鋪く、並びに支配の米良椎葉両山中の儀も右同日同刻大地震にて潰家破損所等夥鋪く御座候。尤も領分支配所共、人馬怪我等の儀は未だ相分り兼ね候段申し越し候。委細の儀は追って申し上ぐ可く候得共先ず此段御届け申し上げ候、以上。

十二月十二日　相良志摩守

この届書写しは他の老中や御目付などへも伝えられた。人吉からは藩主長福が幕府からお暇をいただいて、すぐ帰国してもらうことを希望し、長福も幕府へ願い出たが、呉服橋の御門番を勤めており許可を得ることはできなかった。

㈡、地震による破損の報告

十二月晦日、地震による破損ヶ所の調査書が江戸屋敷に到着。藩主長福は二月二十二日、御用番牧野備前守に〝領内破損の覚〟を提出した。

この〝破損の覚〟によると、城内の本丸、二の丸、三の丸、そして郭内居宅（御館）のほとんどの家屋や櫓門、塀が倒壊（潰）や半壊、大破した。また外曲輪の石垣、櫓門、塀が破損し瓦や壁が落下。城内の崖崩れも十三ヶ所あり、地裂が数ヶ所あった。それらの長さや高さなど一つ一つ記録しているが、それについては省略し、城外の各地の被害について主なものを記すと次のようになっている。



幕府への地震の報告「相良文書」（県立図書館蔵）

一、郡方役所　壱ヶ所大破
一、作事方役所　壱ヶ所大破
一、諸役人詰所六ヶ所　内　三ヶ所半潰，三ヶ所大破
一、客屋　壱ヶ所大破
一、下屋敷　弐ヶ所大破
一、侍屋敷　百七軒
　内　弐軒潰、拾九軒半潰、八拾六軒大破
一、寺院　弐拾五ヶ所　内　五ヶ所半潰、弐拾ヶ所大破
一、社　七ヶ所　内　三ヶ所半潰、四ヶ所大破
一、町家　百三拾四軒
　内　弐拾九軒潰、拾八軒半潰、八拾七軒大破
一、百姓家　五百六拾四軒　内
　三拾壱軒潰、五拾六軒半潰、四百七拾七軒大破
一、山崩　五百六拾四間、但三拾九ヶ所

これによると侍屋敷が一〇七軒、寺院二五ヶ所、神社七ヶ所が倒壊や大破した。

そして町家が一三四軒、百姓家が五六四軒となっており、山崩れも三九ヶ所、五六四間（約一㎞）となっている。しか

し人馬の死亡や怪我人はなかったようである。支配地の米良山と椎葉山についても記しており、米良は侍屋敷、民家が三八軒、椎葉山が五八軒大破したとしている。二度の地震で大きな被害を受けたことを改めて知らされるのである。

お城の破損の修復については翌年安政三年に幕府へ御城修復願書が提出され、普請が行われることになったようである。

㈢、安政二（１８５５）年十月江戸地震

江戸参勤を終わった藩主長福は安政二（１８５５）年四月二十四日、江戸を発駕し人吉へ向かった。ところが途中に発病し、治療しながら六月二十五日どうにか帰城したものの七月十二日、逝去（32歳）した。長福の弟元三郎（頼基）が養子となり、十二月家督を相続した。

地震後の後片付けと修復の取り組み中の藩主の逝去と家督の相続である。葬儀と家督相続に、また多額の経費を要することになった。ところが災難はそれだけでは終わらなかった。この年の十月二日、江戸で大地震が発生した。〝江戸の大地震〟と呼ばれ、『国史大辞典』によると町方の死者四七〇〇、潰一万六〇〇〇余であった。この地震で藩の上屋敷と下屋敷の建物や塀が倒壊した。火災は免れたが大被害を受けた。両屋敷の修復も緊急の課題となった。

そんな中、十二月末、幕府から前年十一月の地震で被災した京都御所の禁裡御普請の手伝いを命じられたのである。翌安政三（１８５６）年三月に手伝金三、六七七両を上納するように伝えられた。四月千両、七月千両、十月に残りの一、六七七両を上納したようである。藩の財政は破綻状態となる。

藩は厳敷御取締令をさらに徹底し、これまでの増税（米一石付五升増）を継続するとともに支出を減らすため、すべての領民に対して〝足軽以下取締方申渡書〟や〝町家倹約申渡〟などを通達し、質素倹約の強制と衣食住への統制を強化した。祝祭行事の簡素化や衣服を細かく規制し取り締まった。一向宗の取り締まりも行われた。しかし財政状況は厳しくなるばかりで、借金の増大の下で三年後は増税することを決定した。安政の大地震は藩にとっても領民にとっても大災難であった。

【おがた・やすゆき／求麻郷土研究会、球磨郡錦町】

方言を味わう⑦

球磨弁クイズ

前田一洋

青井神社の福川義文宮司が書かれた『青井阿蘇神社』によりますと、行列が現在のように市街地の方に繰り出すようになったのは、百年余り前の大正二年から。それまでは、神社の境内の周囲を〝じゅぐりーっ〟と廻って、川端の金刀比羅宮がお旅所であったとのこと。

それが中川原に移されると町中が一段と賑わいをみせ、商品も飛ぶように売れたし、さらにはサーカスのジンタが夜も更けるまで。

イソっさや
おくんち日和りに九日風

イソしかとは、まさに爽やかサッちゃん、今のような気候のこと。かつては衣替えの時でもあり、単衣から袷に着替えられていた。ゴヤの晩には球磨神楽が奉納され、そして九日は待ちに待ったおくんち行列。学校も二時間授業の大サービスをして下さるので、おくんち着物でうったち、おくんち下駄をふんで出掛けたものだった。

おくんちみゃり

「今年のシノも早よしもうてよかったね、安心しておくんちの祭っみゃり行きがなる」

「ほんとん、刈っ倒す前にうう風どもが来てくるれば、吹き倒えて二倍も三倍も手のかかるもんな。どろころ機械も入れはならず」

「今年のおくんちも、いきゃニギやうど」

「こようちゃ、中川原にサーカスやら化けもん屋敷の小屋どもが掛かって、そいくさ人ば押し退けて通らんばんじゃったもんにゃ」

「おどん達ゃ、にいかおくんち着物よば着せてもらうとが、何よかな楽しみじゃった」

[シノ] ①作物の取り入れ　②お祭りのはやしに使う笛　③イノシシのわな

いども留守じゃったぐたった、どけじゃったな」

「孫どもが学校の、うんどうくわりぃ行たとったとばい。おいぎゃの孫どま勉強はどろころじゃるいども、走つくらはいっそとめヒューばかり。どぎゃかならんもんかにゃー」

「そら楽しみなこったい、早かれば、ちょことふきゃ見がならんども、遅すかればいつまででっちゃ運動場におって、応援のしぎゃーのあっどがな。モノは考え様じゃろもん」

[どけ] ①邪魔だ、どけどけッ ②崩れた土手 ③どこに ④至って初期の軽い痴呆症

[勉強はどろころ] ①まあまあ ②親同様全く駄目 ③遊びにばかり熱中 ④最下位

[ヒュー] ①風を切って駆け抜けて行く ②ゆうれいの出現 ③流れ星 ④どべこす

[しぎゃー] ①しじみ貝 ②中止になった試合 ③やり甲斐 ④うるさく騒ぎたてる



よなべ

「おくんち過ぎれば夜の長うなつで、昔ゃよなべで一仕事しおったもんな。縄ぬうたり草履編うだり、籾すりしたりして。まいきゃにゃよながれども食て、唄ども歌うかたで」

「じゃったじゃった、今夜来るばよどの間に寝ろか束納戸の次の間に、ちゅてじゃろ」

「ぜーして、そらよびゃーの唄じゃ

④早霜

[どろころ] ①まあまあ ②うかつに ③泥を跳ね上げるこわれた機械 ④慎重に

[いきゃ] ①意外にも ②息が切れる寸前 ③さぞかし ④思いもしなかった大騒ぎに

[こようちゃ] ①我が家に一番近い隣 ②わら打ち仕事 ③紙縒りのヒモ ④むかしは

[そいくさ] ①畑に茂った雑草 ②食用にもなる雑草 ③それこそ ④美しい草花

[にいか] ①真新しい ②着古しの ③縫いそこないの ④派手な柄のついた訪問着

運動会

「きにゅおってはちょこと寄ってみたらよ。おまいどま、そぎゃの唄歌うて、どこそこよびゃしてされきおったとじゃあるみゃーで」

[よなべ] ①夜食の鍋もの ②だんご汁 ③理由もないのに村八分に逢う ④夜の作業

[よながれ] ①見事な流れ星 ②川でおぼれた人の魂 ③夜の川のせせらぎ ④夜食

[よびゃ] ①夜陰に乗じて女（時には男）のもとに忍んで行く ②夜にだけ出てくるヘビ ③火の用心の夜警 ④真面目な夜学生

○

さあ、いかがでしたか。今回も正解は、ご自由に。

【まえだ・かずひろ／人吉市】

くまがわ春秋歌壇　いもご短歌会

腰ほども伸びる草丈刈り込めば西空近く雷鳴を聞く
消耗の夏を通して歯の治療わが身の軽さ計り器にみる
三原　竹二

リオの地で息子の技の一瞬を応援旗（ぼた）で顔かくす母
庭先の芝生の奥に白百合のごきげんようと首かしげおり
坂本　ケイ

蚊に刺され庭の茗荷をひとつ採り刻みて入るる夫の汁に
ウオーキング兼ねて反戦ビラ配る一石二鳥ねと夫（つま）と語りて
上田　廸子

プールから帰りて学童の床の上眠りこけいし一年生よ
灼熱にひと夏燃えし残り火か畦道染めて彼岸花咲く
宮川しのぶ

ジイジイと蝉の鳴く声姦（かしま）しく地球の怒りわが身を焦がす
バンザイの声を聞きつつわが心共闘の火を高く掲げん
吉岡　弘晴

反省と加害に触れぬ宰相のことば虚（うつ）ろに終戦記念日
熱烈なる広島カープのファンなりと語り酌みたり中沢啓治と
※中沢啓治は「はだしのゲン」の作者。熱烈な広島ファンで有名
上田　精一

郡築干拓の農業 ⑦

磯田　毅

消えた畜産農家

今郡築には畜産農家がいません。以前はそれぞれの農家に馬や牛など農耕用の家畜が飼われていたのですが、農業機械へ替わってゆくうちにほとんどの農家からいなくなりました。50～60年前は卵が目的の鶏や羊毛を採るための羊、あるいはヤギや豚など小規模に飼っていた農家も多かったようです。我が家も、私が小学生の頃までは馬やヤギを飼っていて、独特なにおいのするヤギの乳を毎日飲んでいた記憶があります。馬を飼っていた農家では、畔草を刈るのが子供の日課となっていたようですので大変だったと思いますが、立派に家族の一員として子供も貢献していたのですね。（今は豊かすぎて子供の存在感を見つけ難くしているのでは？）

一時期、豚の飼育が流行ったことがあります。農家の中には数百頭（羽）の豚や鶏を販売用に飼う農家もありましたが、1962年～1971年にかけて鶏卵・鶏肉や豚肉の輸入制限が撤廃されたことから価格が下がり、養鶏や養豚農家は転業や廃業を余儀なくされました。私が住む三番町では当時60軒あった農家の内6軒ほどが畜産農家だったようですが、今はゼロです。



現在、熊本県の畜産は農業産出額のおよそ3割を占める重要な位置にありますが、飼料の殆どを米国からの輸入に頼っており自給飼料への転換が急がれています。しかし、畜産を巡る状況は、郡築の畜産が無くなった時と同じく外国の安い肉や酪農製品の脅威にさらされています。どうしてかというと、関税や輸入制限などの保護制度がＴＴＰなどの自由貿易推進によって無くされようとしているからです。豪州の牛肉やニュージーランドの牛乳、米国の豚肉などの価格は、国産で太刀打ちできない低価格ですので、このままだと幾ら補助金を使っても衰退するばかりです。

真の豊かさとは？

畜産を含めた循環型農業は農地の地力を保ち持続する農業を実現することで国民の生活を豊かにします。そのためにも一定の畜産業を維持していく必要が有ります。しかし、小手先の補助金を使った政策では、畜産業の将来はありません。豊かな家庭に育った中央の官僚の方たちは、そのことに気づいていないか、あるいは無視しているのか分かりませんが、今の農政は早く転換されるべきと強く思います。

県議会で私が取り上げた南米ウルグアイの前大統領ムヒカさんの言葉、「貧しい人とは物を少ししか持っていない人の事ではなく、無限の欲がありいくらあっても満足しない人の事だ」を最後に掲げます。

【いそだ・こわし／農業、八代市】

くまがわ狂句

村上鬼拳

のめり込み　ボランティアでは失うなった
つるの一声　えらい抜擢でしたなァ
三枚目　なかなか移動せん栞
平行線　オシドリの如っしとらすが
ゆるうつと　一世紀ども眺めんと
幼なじみ　手錠に上着掛けてやり
ある日突然　会社の消えてしもうとる
今もって　瞼には零戦のおる
まがいもん　ダム反対て思うたら
五月病　地球の裏でばしあるか

【むらかみ・きけん／人吉市】

おがんで歩き記・食べて歩き記

中島まゆみ



中原コミセン主催「秋の相良三十三観音巡り」の参加者

9月21日、晴天のなか、中原コミセン（人吉市）「秋の相良三十三観音巡り」に参加しました。参加者は23名、講師の先生、バスの運転手さん、コミセン（公民館）の職員さんを含めると26名になります

講師は、郷土歴史研究家の前田一洋先生。人吉盆地の成り立ち、歴史・文化・農耕などていねいに、しかも、おもしろく教えてくださいました。

「三十三観音巡り」は、江戸時代に、庶民に広がったそうです。信仰を深めること、お願い事をすることは勿論ですけれども、各地の農作物を見て成長の具合を比べ、時には珍しい作物があると種の交換を行ったりすることもしていたようです。

バスは一か所目の十四番札所、十島観音に到着。聖観音像は、真宗禁制の混乱を乗り越えてきたためか、一部に傷みがありますが、凛と前を向き、私たちを見つめていらっしゃるかのよう。

「お接待」のお母さん達の元気な「おはようございます」に迎えられ、お参りの後には、お茶や手作りのお総菜・お菓子・漬物と心尽しの品が振舞われる。女性軍は材料や作り方などに話が弾みます。この「お接待」も観音巡りの大きな魅力のひとつ。「お接待」マップをつくれるほど。お母さん達の笑顔に見送られバスは次の目的地へ。



お接待のテーブルにはお総菜や漬物などが並ぶ



栖山観音

蓑毛観音（15番札所）、廻り観音（18番札所）、内山観音（19番札所）、栖山観音（23番札所）、猫寺観音（24番札所）、龍泉寺観音（24番札所）、そのあと城泉寺さんに「寄り道」し、中山観音（28番札所）へ。そこで偶然、お友だちに遭遇。



宮原観音

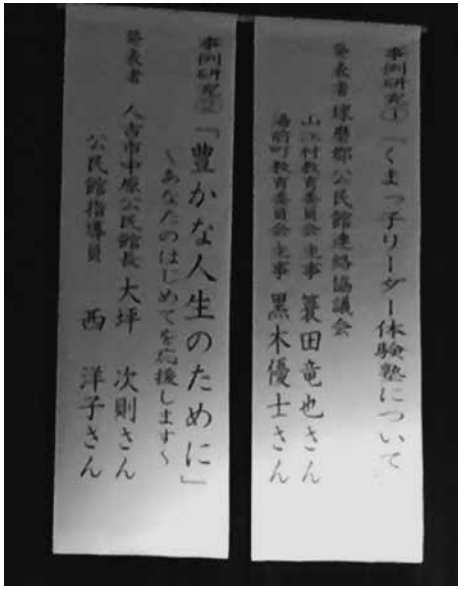
次に、岡原にある二十九番札所・宮原観音へ。収穫間近の稲穂と満開の彼岸花の咲く狭い道の先に、藁ぶきの観音堂が見えてきました。お堂の中に入ると、観音様を守るように迫力のある不動尊と毘沙門天がまず目に入ります。室町時代の創建当時のものであろうとのことで、彩色の殆どは剥がれているが姿はしっかり威厳を備え、残る一部の色から鮮やかな像が想像できます。細密に作られた厨子の中に少女のようなふっくらとした優しい観音様が祀られています。床に目を移すと大小の窪みは昔の子供たちが駒遊びをした跡とのことで、着物を着た子供たちが遊んでいる姿や声が浮かんできます。最後は、中尾観音（23番札所）。

室町時代から歴史を綴り幾多の混乱や災害も経てきた観音様たち。これからも未来へと綴られていく一ページに今ここで立ち会えていることは、一つの奇跡にも思えます。慈悲深い観音様がたにお会いし、心穏やかでない時の自分を反省し、日常に感謝をする一日となりました。

【なかしま・まゆみ／人吉市】

トンネルを抜けてみると

公民館指導員　西　洋子



9月30日に人吉市カルチャーパレスで、「第61回熊本県公民館大会・平成28年度熊本県社会教育大会　人を磨く！　地域を磨く　研究大会in人吉球磨」という舌を噛みそうな長い名前の会議で事例報告をさせていただきました。報告のタイトルは「豊かな人生のために～あなたのはじめてを応援します～」で、勤務先の人吉市中原公民館の生涯学習に関する活動内容を紹介することでした。

中原公民館は今年の春、文科省の優良公民館として表彰されました。それで「事例報告」して欲しいとなったのですが、7月初旬に報告することが決まると同時に、ゆううつな日々がはじまりました。こうした会議で報告したことなどなく、報告内容を考えるたびに気分は落ち込んでいくばかり。自信がないというよりは、「嫌で、嫌で」仕方ないというのが当時の気分でしょうか。とにかく「嫌」でした。この気分は晴れることなくつづきました。「中原公民館の活動を淡々と紹介すればいい」などのアドバイスをいただきました。確かに、それでいいのでしょうが、それを口頭で説明するのは簡単ではありません。それで、ますます落ち込んでいきました。

報告のタイトルは「豊かな人生のために」ですが、「ひどい人生」に陥りました。食欲も落ち、胃に痛みが走り、直前の日曜日には救急病院へ駆け込みました。「これは、労災に当たりませんか?」と本気でいいたくなるほどでした。それに加えて日頃の仕事もあります。時間が足りない！　すっきりした気分になれない日が2ヶ月以上つづき、報告の日は近づいてきました。ああ、どうしよう。報告のリハーサルをしても、そのたびに内容がちがう状況。



事例報告の様子9月30日）

とうとう報告日になりました。当日も緊張はつづいていました。ところが突然、冷静になりました。霧が晴れるように自然体になっていました。CDの準備ができず、スマホからマイクで音声を拾ったり、パワーポイントの操作方法を忘れるなどの「ドタバタ」もありましたが、動転しませんでした。不思議なほどスムーズに話ができました。しかも、原稿をまったく読まないで報告しました。いい報告だったかは分かりませんが、「楽しくなければ公民館ではない」という、いつも大切にしていることを基調にして、自然体で日頃の活動を紹介でき、個人的には満足しています。

報告の最後までアドバイスをしてくださった方のお話によると、「準備をくりかえし重ねることで、報告内容を知らず知らずのうちに整理していた。それで自然体になれたのではないか」とのことです。そうかもしれませんが、その言葉の意味をいまはまだ理解していないかもしれません。

それにしても、いろいろなみなさんに助けていただきました。そうしたみ

なさんは、報告が終わるまでわたしのことを心配していただいたようです。アドバイスはできた。でも、自分で話すわけでないことにストレスを感じられたようです。バレーボールの選手と監督の関係に似ているかもしれません。プレーをするのは選手で、監督はひたすら選手を「見守る」しかないのは、確かに、監督さんには辛いことだろうと思います。応援してくださったみなさまには、お礼を申し上げるしかありません。本当に、ありがとうございました。



日頃の私

今回は、「中原公民館の活動の一部」を公民館活動の一例として紹介させていただきました。ただ、紹介しただけです。「事例報告」は「講演」とはちがいます。ところが、勘違いしている人も多く、友だちのなかには「講演したんですか。すごいですね」という人もいます。そのたびに、「事例報告」と「講演」はちがうと説明しますが、なか なか理解していただけません。読者のみなさんも勘違いしないでくださいね。「公民館指導員」の肩書きにも騙されないでくだいね。「指導」というと、なにかを教えているように誤解されますが、じっさいには公民館を楽しくするための「雑用」をしているだけです。公民館は修業の場所ではありません。「はじめての一歩」を応援するところです。なにか勉強したいと思ったときには公民館に遊びにきてください。私たちは、そういう人たちを応援します。

2ヶ月を超えるトンネルは長い時間でした。そのトンネルを出てみると、いつもの公民館が優しくむかえてくれました。

【にし・ようこ／人吉市】

本当にあった話

天井裏の生活者 ❺

久馬　凌

男の視野に入った巨大物質、それは瀬戸石ダムであった。昼間と夜間でダムはその姿を変える。暗闇でのダムは圧倒的物量性を誇示し、人間の精神を威圧する。放水路から流れ出る水音も違って聞こえる。

しかし男には、巨大な物資は光明であったであろう。深夜に道路を歩いたことがある者なら誰でも知っているように、わずかな光でも救いになる。男は瀬戸石ダムで休憩することにした。人吉までは、まだ、ずいぶんと距離がある。ダムの近くには駐車場があった。数台の自動車が並んでいた。鍵をかけていない車両が1台あった。しかも鍵をつけたままにしてあった。男は乗り込み、車を人吉に向けた。男は自動車を運転できるのであった。自動車を使って宮崎に向かおうと思えば、博多駅近くで車を盗み、宮崎まで行けた。しかし、男は、自己の自転車を利用して宮崎に向かう方法を選択していた。

男は人吉市内に入る直前に、その車を放置した。理由は分からない。市内に入ったので、安堵したのであろうか。男は人吉駅近くまで、ふたたび歩いた。夜は明けていなかった。男は別の自動車を見つけた。その車も鍵がついたままだった。男は直ぐにその自動車に乗り込み、車を発進させた。自動車の所有者は近くにいた。直ぐに、警察に連絡した。人吉署は直ちに手配した。

警察の捜査システムの仕組を知らない。いずれにせよ人吉署から宮崎県警に連絡が届いていた。人吉で自動車を盗んでから、わずか7時間後に、男は自動車窃盗容疑で宮崎県警に逮捕されたのだ。人吉署の手配連絡は、熊本県警内

はもちろんのこと、宮崎県警にも、おそらくは鹿児島県警にも伝えられていたであろう。逮捕時、男の所持金は35円であった。男は母の顔を見る前に警察に捕まった。宮崎県警は宮崎市内に、身元引受人になってくれる者はいないかと男に質問した。男は、「いない」と答えた。母親には知らせないで欲しいともいった。警察は母親に男のことを知らせなかった。

男はながく黙秘をつづけていた。母親や知人に事情を知られたくなかったからであろうか。黙秘時間がつづいたため、捜査は遅延した。単純な自動車窃盗事件であれば、男は比較的簡単に釈放されていたであろう。だが、身元引受人が存在せず住所不定事件である。

長い沈黙のあと、男は話しはじめた。宮崎県警は男の供述に基づき裏付け捜査を開始した。宮崎市から、人吉市、瀬戸石ダム、そして、あの家、さらに博多駅前の公園の捜査に赴いた。捜査の順序は分からない。あの家には3回以上やってきた。電話での事情確認もあった。八代署からは一切連絡はなかった。近くの駐在所の警官は瀬戸石ダムや人吉での自動車窃盗を含め事件のことを一切知らなかった。管轄の移動がなにを意味するのか、よく分かった。

宮崎県警は、犯人に対して重い処分を望むかとも言った。被害感情は求刑要素になって判決内容に影響する。僕は特にないと返事した。県警は意外だといったようなことを言った。確かに、殺傷事件になりかねない事件で、加重罰を求めても不思議でない。しかし、路上生活者であったことなど犯人の背景事情を知るにつれて、僕の被害者意識は薄れていった。手錠腰縄姿の犯人の姿をみたことも犯人に対して同情的にさせた。男は懲役2年の実刑判決を受けたようである。予想外に重い刑である。男には、他にも余罪があったのかもしれない。

最後の現場捜査のとき、刑事たちは、近くに食事処はないかと質問した。「道の駅さかもと」の食堂を紹介した。刑事たちはすでに、そこを利用したことがあったらしく、「他にないか、せっかくだから八代名物を食べてみたい」と話した。数軒の名前をあげた。刑事たちは、その一軒に向かった。

（つづく）

【きゅうま・すぐる／八代市】

鶺鴒（せきれい）短歌会

八月詠草

みずからの縄張り守る若鮎はおとりの業にかかる悲しさ
銀鱗を光らせ泳ぐ若鮎は早瀬に群れて遡上を始む
守永　和久

争いの後の空しさ埋めるがに夜白むまで酒汲みおりぬ
欄干に陽焼けの皮膚を躍らせて高校生は飛沫あげたり
河内　徹夫

友の訃報心を洗ふ風に乗り猛暑厭わず荒尾へ向かふ
開票を待たず当確万歳とライトグリーンの女性都知事は
中村美喜子

厨房に佇む男不甲斐なさ妻は庭にて花に水やる
夏休み草刈り励む里山に一瞬のシャワー風の吹きたり
西　武喜

夫婦だけ迎えるお盆ままごとで数えて作るだんごや煮しめ
お迎えも送るもふたり盆三日寂しさまぎらすリオと甲子園
釜田　操

子育てが終わつた頃に孫育て一息つかず親の介護を
フラミンゴ一本足で顔隠し疲れとれるかあの寝姿で
緒方　保正

墓そうじみんな集ひて始めるも話はずみて手はおろそかに
木陰にてラジオ聞きつつ一休み平和かみしめ歳月想ふ
中原　康子

地震にて墓が壊され心急く寺に納めてやっとの安堵
初盆で出逢う人々知らぬ人　名前確かめ目礼交わす
三原　光代

ウオーキングスマホに見入り会釈なし景色の見えぬ一人の世界
山頂の雲は流れて茜さす光いずるや市房山に
橋詰　了一

師の写真見れば見るほど引き込まる其処にいるよな錯覚おこす
久しぶり熊本市街で道迷ふどうにか着きてほっと胸なで
宮山都保美

鴨一羽濃霧の中に紛れ入る羽音残していずくを指すや
連日の地震の死者の報道に遠き地なれど吾も涙す
堀田　英雄

くまがわの神さん仏さん ❺

老神神社に行かんばんよ

宮原信晃

人吉らしい、人吉にしかない、風に吹かれる神社に行ってみませんか。

人吉に来たならば、先ずは国宝青井阿蘇神社に御参拝下さい。御時間があれば、球磨川を挟んだ「**老神神社**」へも足をお運び下さいませ。

参道の真ん中には八角形の石灯籠がドンと建ち、真ん中を真っ直ぐには拝殿へは向かえず、その左を見ると、そこにはずらりと、淡島さん（健康）、お稲荷さん（商売）、弁天さん（芸能）、そして天神さん（学問）と「四つの神様達を詣ってから来い」とばかりに、貫禄の神様たちが並んでおられる。

鈴を鳴らし、お賽銭を投げ入れれば――、これが、お金が入らない。

お金をはじき出す装置付きか。

はじき出された小銭を再度、賽銭箱に入れて、見上げると、そこには「老神（おいかみ）」様が鎮座されている。

数年前に熊本市内から初めてお越しのご年配の女性が「老いた神様って初めて」といっておられた。不思議な名称かは、地元の者は気付かない。

不思議ついでに、口を閉じた狛犬さんの股間には、男根があり、口を開いた狛犬さんは、玉をくわえて、「玉はもういらん」という素振り。昭和の石工・角田鶴吉の作である。

老神神社の左奥には天満宮があって、西南戦争の鉄砲の弾の後が今も12ヶ所もあるというのだ。

天満宮のお堂の周りを、ひとつ、ふたつ、みっつと弾傷を探して四隅を回る。弾傷か、杉板の節穴の区別がつかないジレンマの時間。「お前の目は節穴か」と神様の声が聞こえそうになる。

「老神神社」の名称にもお二人の神様がおられ、皆さんをお待ちです。

【みやはら・のぶあき／人吉おおくま座の会事務局長】



お堂の節穴から何が見えると思いますか？

故郷の野づら

…地震から五ケ月…

村上ますえ

橋を渡り堤防の高みに立つ
ふるさとの山はけぶって
なだらかな弧を描く山容は昔のまま
下に広がる水田は　みどり
知らなければ見まがう一面の緑
もはや水田ではないという
水のない畑地に生い茂る大豆の緑

地塞から五ケ月
本来なら水をたたえ
穂を出しかけた稲田の広がりか
一面に続くはず
水路は壊れ　干上がった田は
転作を強いられた

「今年は飢饉よ」
不安げなことば
「ＴＰＰでコメの輸入拡大の口実つくりにされるかもよ
　交渉妥結を急いでるから」
何とも腹立たしい庶民と政治の乖離

堤防の草むらに沿って並ぶ
夥しい廃棄物の袋の列も
被災の傷痕を語っている

【むらかみ・ますえ／人吉市出身、千葉県浦安市】

上杉芳野の「あがっ段」⑥

おどん達ちゃー柳別府（やなぎんびゅ～）婦人会

主人の仕事の関係で転勤が続き、熊本・北海道・横須賀そして地元、旧上村に帰って来て30年になる。

その頃の婦人会は、今の4～5倍ほどの人数だった。私も若かったし、今みたいに太っていなかったので、可愛くてウブだった。

それが何年も経つうちにだんだんと体重も増え、球磨弁まる出しのおてもやんの様になっていった。今まで活動しておられた婦人会長や会員の人たちも年と共に老人会に移ってしまい、若い人たちは勤め人が多くて婦人会に入会する人が少なくなり、今現在の人数は13名である。

しかし「少ないながらも楽しい婦人会」をモットーに活動してきた。

夏祭りの参加、火事などがあった時の消防団の人たちへの炊き出し、公民館の清掃などの奉仕をする。

ゴキブリが生まれる5月頃には「ゴキブリ団子」作りをする。みんなで材料を切り、団子にして丸める。人数分に分け公民館にも、あっちこっちに置いておく。我が家にも持ち帰り「ゴキブリ団子」をあっちこっちゴキブリが出そうな所に置いておくと、それをなめたゴキブリが、ひょろヒョロしながら出てくる。



今年の敬老の日にも大活躍


完成したゴキブリ団子を手にする柳別府婦人会のメンバー

それを見た時はハエ叩きで思いっきり叩く。

するとご臨終ですといわんばかりにコテンとひっくり返る。時々は叩かなくても自分でひっくり返っている時もある。時には孫もひ孫もシンでいる。そんな時は「ごめんね、今度生まれてくる時は嫌われない生き物になってね」と心の中で思う。

婦人会は敬老会のお手伝いもします。季節の花を持ち寄り（彼岸花やコスモスいろいろ）テーブルの所々に小さい花瓶に入れて置く。

玄関には栗の木やススキなども飾る。お弁当や果物を綺麗に並べる。

宴会になると宝塚劇団に早変わり、来賓の人も交えて歌に踊りに盛り上げる。

何もない時も茶話会や食事会で時々顔見せする。いつも集まると馬鹿話に花が咲き大笑いの私達、柳別府（やなぎんびゅー）婦人会。

少ない人数でも地区の人たちを支え何かのお役にたつためにもなくしてはならない、なくてはならない婦人会にしたいものです。

【うえすぎ・よしの／球磨郡の爆笑王、目指すは女きみまろ。あさぎり町上】

「ゴキブリ団子の作り方」

準備する物：おろし金、ボール
材料Ⓐ：ホウ酸（粉末）500㌘（一人250㌘）、玉ねぎニケ、小麦粉140㌘、砂糖（大さじ2杯）、牛乳（大さじ1杯）。団子50個分です。
作り方：玉ねぎをおろし金でおろす。その中にⒶの材料を入れ混ぜ合わせると団子の出来上がり。

皆さんも作って試してみて下さい。4月か5月頃が良いと思います。人にあげても喜ばれます。

文豪の作品を読んでみました

野崎育代



北御門 二郎／訳『トルストイ短編集』
2016 年7月 17 日　人吉中央出版社

本書は5篇の物語をまとめた短編集です。

読書は嫌いではありません。自己啓発の本やフィクション、芸能人のエッセイなど大好きです。しかし今回はトルストイ。崇高な大家というイメージがあり、私には分不相応なジャンルの作品だろうと思っていました。

実際に読み進めてみると、すっと物語に入り込んでいけた気がします。同時にこのロシア帝政時代の物語は、楽しい内容ではなく幸せな結末もありません。読み終わっても私の中に何だか満たされない、もやっとしたものが残ります。

まず「カフカーズの捕虜（とりこ）」では最期が近づいた母に会いにいく途中、異人の敵に捕らえられた主人公が苦しい経験を乗り越え、ついに味方に助けられます。しかし改めて母に会いに行くのかと思ったら、それをやめてしまうのです。第二話「神は真実を見そなわす…」でも主人公の冤罪が晴れたにもかかわらず最悪の事態が待っています。第三話「舞踏会の後」にしても恋愛成就でハッピーエンドと思いきや意外な結末をむかえたり、「壷のアリョーシャ」も、主人公の幸せな結末を願いつつ読み進めましたが、最期は……。最終話「贋造（がんぞう）クーポン」も果てしなく続く不幸の連鎖は、いつになったら断ち切れるのかと思っていたら物語は終わってしまいました。

悲しい物語ばかりですけれども、登場人物の中に必ずいる善人の優しさ、慈悲深さに触れ、忘れていた感覚を思い出しました。奥が深い物語には残酷さと優しさが渾然一体となっているのでしょう。

トルストイは平和主義者といわれています。作品を通して、なるほどと合点がいきました。普段から雑念が多く、集中力が散漫になりがちな私が、思いのほか一気に読めたのはトルストイの作品力もさることながら北御門二郎さんの訳が素晴らしかったからでしょう。この短編集に出会えた有縁に感謝いたします。

【のざき・いくよ／団体職員、人吉市】

帝政ロシア時代の物語を
北御門二郎の「心訳」で贈る
現代人へのメッセージ

北御門 二郎・訳
トルストイ短編集



新たに編集された「カフカーズの捕虜」「神は真実を見そなわす」「舞踏会の後」「壷のアリョーシャ」「贋造クーポン」の5本を収録

レフ・トルストイ／作
北御門 二郎／訳
表紙絵／田口宏昭
北御門すすぐ・たえ子／編

■A5 判／並製本／192 頁
■定価 1,500 円（+税）
送料 100 円

直販の申込は
〒868-0086　熊本県人吉市下原田町瓜生田 675-3
TEL・FAX0966-22-7601　info@hitoyoshi.co.jp
人吉中央出版社

八代新庁舎建設問題

上村雄一

苦渋の選択

八代市議会は９月23日に閉幕した。市役所執行部は、新庁舎建設について、職員数７００人、床面積を１万９千平方メートル、事業費を１１２億円にする計画案を議会に提出。議会は４項目の付帯決議をつけたうえでこれを可決した。計画案は、熊日新聞が８月６日付記事で報道した内容と同一であった。８月５日以前に、市役所執行部は方針を決定し、その方針どおりに建設計画は進んだ。熊日新聞は８月に市役所問題の記事を４回掲載した。しかし９月には１度も掲載しなかった。建設問題は決着済みで、市議会の議論・結論は報道するにあたいしないと判断したのだろうか。

計画案について、八代市長は「苦渋の選択」であると発言した。わかりにくい発言だ。今回の計画案は、以前に市長が提案していた建設計画と比較するとき、市庁舎規模を縮小する内容で、市長は計画変更を「苦渋の選択」というのだろうか。市庁舎建設にかぎらず、すべての計画は、提案後の各種の議論を通じて改定・変更されることを当然の前提にしている。議論には、各種委員会での討議はもちろんパブコメなども含まれる。それらの議論にもとづき計画を改めることは「苦渋の選択」ではなく「自然な選択」と表現すべきだろう。

構想力

八代市は、八代市の人口は急減すると予測している。少子化状況を考えるならば、それは悲観的な予測ではない。外国人労働者の受け入れをすすめるなどの措置をとらないかぎり人口は増えない。人口数は出生数に絶対的に対応し、これを中途で変えることは不可能だ。これまでの出生率に照らすとき人口減少は確実にすすむ。それは悲観的な予測でなく、確定した事実である。問題は、人口急減社会をどのような社会としてイメージして、そのなかで、どのような社会に造りあげていくのかを構想するのかにある。市庁舎は社会と切り離された構造物ではない。単純に考えれば、人口減少に比例して市役所職員数も縮小し、それにともない市庁舎の規模も小さくなるとの結論になる。人口（納税者）の税負担能力には限度がある。



立ち入り禁止になっている現在の八代市庁舎

八代市は、なんらかの将来ビジョンを描き、それと関係づけて市庁舎のあり方を考えているだろう。将来ビジョンと無関係に市庁舎というハコモノだけをとりだして、それだけに注目することは、そもそも不可能にちがいない。しかし、遺憾ながら、八代市の議論では、将来ビジョンと新庁舎の関係はみえてこない。「少子高齢・人口減少社会への対応、「地方分権改革」による業務量の増加、地勢状況」を考えれば職員数の大幅な減少は想定できないと八代市は云う。しかし、そのことを具体的・数値的に説明しているわけではなく、まして将来のビジョンと関係づけながら説明しているようにはみえない。

市民の同意

市民の税負担力には限りがある。人口は確実に減少するのであるから、所得が急増する状況が発生しないかぎり、市の収入（市民が納税した金銭の量）も減少する。普通に考えれば、そうなる。高度成長時代とはちがい、パイ（総収入）が増える状況のもとに今はない、パイをどのように分配するかは社会の構成員の同意の問題である。たとえばコンピュータを活用すればパイの合理的配分方法は判明するのかといえば、そうではない。コンピュータについてすらそうだ。ましてや少数の人間の小さい頭脳が出した結論を直ぐに信用するわけにいかない。パイの合理

的分配は計算の問題ではなく、合意の問題である。コンピュータが出した結論を提示して、それがもっとも適切な配分法だといわれても、結論にいたるプロセスがわかなければ結論の妥当性を市民(納税者)は判断しようがない。

地震によって八代市の市庁舎は利用できなくなり、新しい市庁舎を建設せざるをえなくなった。ここまでは、ほとんどの市民は納得する。そこから先は別だ。市庁舎建設問題はパイの配分問題にほかならない。大幅な不便が発生しているのであればともかく、少々の不便なら市民は辛抱する。市庁舎建設は八代市のような小さい自治体にとっては大問題である。少し遅くなってもかまわないので、市民が「同意」できるような透明度のたかいプロセスを踏んで計画は策定されるべきだ。9月議会をみるかぎり、いまだ、そうはなっていない。八代市長は、計画案を「苦渋の選択」と発言したけれども、市長の「苦渋」の内容すら市民は知らない。

【うえむら・ゆういち／編集主幹】

八代新庁舎建設問題・仮設庁舎

（編集部）

本庁舎北側の敷地内に仮設庁舎が完成し、3日から業務を開始した。支所、公共施設、民間ビルの市内14箇所に分散している本庁舎職務のうち6部30課が仮設庁舎に入った。これにより分散先は8ヶ所になった。仮設庁舎はプレハブ造り2階建ての2棟で床面積は約5千平方メートル。総事業費は約3億6千万円。住民票、戸籍、税金、年金、国民健康保険などの部署が入った。市長室・議会などは鏡支所に残った。



完成した八代市仮設庁舎

東京オリンピック⑦

ドーピング

荊田吉富

リオオリンピックではロシアの国ぐるみのドーピング疑惑が発生し、IOCはロシア選手団389人のうち118人を除外し、パラリンピックではロシア選手団の全員が除外されました。

オリンピック憲章にアマチュアリズムがあった頃はドーピングが大きな問題になることはありませんでしたが、プロ選手の出場とメダリストに莫大な金銭の見返りを与えることを認める商業オリンピックになると、第25回大会から開催希望国が6か国と増加し、お金ほしさにドーピングも多発するようになりました。

オリンピックにおいてドーピング検査で金メダルを剥奪された初の選手は水泳四百メートル自由形のリック・デモントで、検出されたのは風邪薬のエフェドリンでした。

競技の前に使用をやめて発覚を免れるのを防ぐためにIOCは有力選手には抜き打ちの検査を始めており、これではアスリートは選手である期間中は風邪をひいても薬は飲めないということになりました。

ソウルオリンピック百メートル決勝で9秒79で優勝して金メダリストを剥奪されたベン・ジョンソンが使用したスタノゾロールはアメリカ医薬品局に認可されています。

現在ではドーピング発覚を防ぐ隠蔽剤が使われだし、この隠蔽剤を検出する薬まで使用されるようになり、いたちごっことなっています。

日本は過去薬物違反者は皆無であり、スポーツ庁はクリーンなスポーツの実現に向けての法改正検討など、四年後に向けた態勢づくりを急いでいます。そのほか検査員の養成や検査技術の開発に三億円を計上し、世界のスポーツ界に関する情報収集態勢の強化などにも二億円を要求。違反者への刑罰導入の是非については今後の検討課題となっています。

【かりた・よしとむ／税理士・行政書士、東京都】

復刻掲載

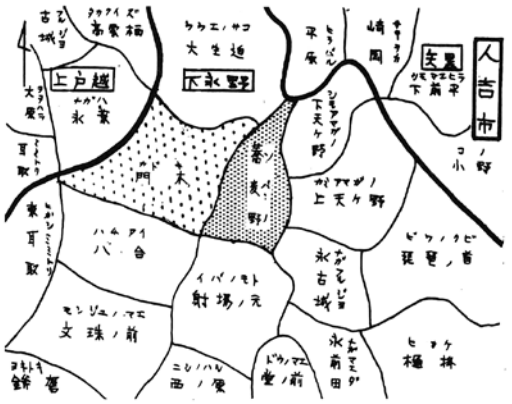
字図で見る球磨の地名 ⑦ 上村重次

【おことわり】本連載は平成6年から9年にかけて執筆された復刻版で、市町村合併前の地名となっています。お気づきの点がありましたらお知らせください。

蕎麦野（ソバノ）

―人吉市下永野―

人吉市下永野町に蕎麦野という小字があり、ソバの特産地のような錯覚を起こさせる。動植物の名称や米・麦・粟・稗・豆などの穀類、菜・芋・大根・牛蒡・蓮といった野菜、柿・梨・栗・柚など果樹の名称を名乗らせる地名は数多くある。それらの地名の現地を訪れ、或いは字図を見て検討すると、名は実体にそむくのが普通である。早い話が動植物名称の地名は、その生息地や産地とは関係がなく、ただ名を借りているだけ、というのが殆どである。



穀物のソバは古名のソバムギ（蕎麦）の略語で『和名抄』には「蕎麦、曾波牟岐、一云久呂無木」とあって、クロムキとも呼ばれ古代から食用されてきた。球磨地方ではソバを栽培する焼畑をソバコバと呼ぶ。しかし、焼畑のことをソバコバという意はない。焼畑栽植は地力の関係から初年度にソバ、二年目にはアワ、三年目アズキ、四年目キビというように作目を替え、六～七年後には栽培をやめて山林に戻してしまう。だから一過性的なソバコバがソバ地名として定着することは考えにくい。

熊本県内の市町村字名で蕎麦地名を探すと熊本市旧国府村字蕎麦田（ソバタン）、本渡市下浦字蕎麦畑（ソバハタケ）、それに人吉市下永野字蕎麦野を合わせて僅か三例しかない。全国に視野を広げるため『日本地名索引』を見ても、蕎麦を用字する地名は七件しかない。このようなソバ地名分布状況からみても、蕎麦地名と穀物のソバは結びつきそうにない。

とすれば地名の蕎麦は何を意味するのだろうか。『地名の語源』（角川小辞典）は蕎麦地、蕎麦沢、蕎麦粒山などの例をあげ、愛知・岐阜県で砂礫土のことをサバと呼ぶことから「蕎麦地名はサバの転化が多い」と指摘している。

縄文前期の曾畑式土器の出土遺跡として有名な宇土市の曾畑貝塚の一帯は砂礫地層である。曾畑（ソバタ）と蕎麦田、蕎麦畑は同系地名とみることができるので『地名の語源』は説得力があるように思えるものの〝地名を命名し維持してきた先人たちは土壌学や地質分類に秀れていた〟という前提がなければ蕎麦地名と砂礫地を結びつける説は成立しないと考える。

天草郡御所浦町御所浦島の南西端に野傍（ノソバ）という小字があり、地図地名ではノサバ崎になっている。この傍（ソバ）が蕎麦地名の原点と思われる。岬（崎）は陸地に主眼を置いて見れば野傍でもある。人吉の蕎麦野は上戸越境を表す字門木（カドキ）の隣だから「境木のそば地」の意と解釈される。

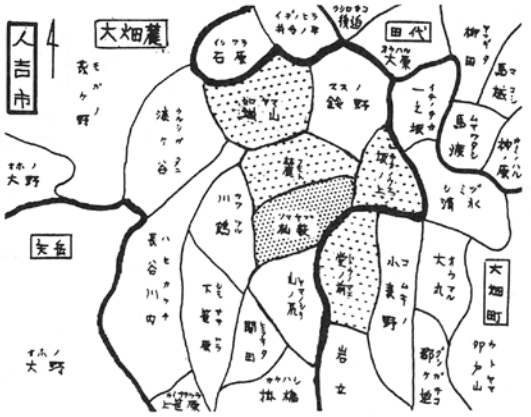
杣藪（ソマヤブ）

―人吉市大畑麓町―

杣という文字は木と山を合わせた和製漢字で、現代流で言えば造林地の意である。この和字「杣」は奈良時代から使用されていて、宝亀十一年（７８０）の西大寺資材帳には杣の字が見えるという。『萬葉集』巻十一・二六四五の歌には

みやぎひく　いづみのそまに　たつたみの
宮桟引　泉之追馬喚犬二　立民乃
やすむときなく　こひわたるかも
息時無　恋渡可聞

とあって〝追馬喚犬〟を「そま（杣）」に当ててある。農耕馬には左はサシ、



右はケシと指示していたが、萬葉歌の時代には馬を追うときは〝ソ〟、犬を呼ぶのは〝マ〟と言ったので、二語合わせた〝ソマ〟を〝追馬喚犬〟で表現したものと解説されている。

他にも萬葉集には巻十二・二九九一

たらちねの　ははがかふこの　まゆごもり
垂乳根之　母我養蚕乃　眉隠
いぶせくもあるか　いもにあはずて

馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿　異母二不相而

のように、いぶせし（うっとうしい）に馬聲蜂音を当てるなど、ナゾ語的な表記がある。現代の五月蝿（うるさい）などの宛て字は萬葉歌にルーツがあるのだろうか。

ともあれ造林地のソマは古くからなじみ親しまれた語であったために、杣藪の和字を造り出す一方では、追馬喚犬のナゾ表記がまかり通ったのであろう。

しかしながら、人吉市大畑麓町字杣という地名を、古代いらいのソマ（造林地）に結びつけて考えるのには、いささか抵抗感がある。第一点は古くから林業の盛んであった球磨地方の小字で杣地名は球磨村神瀬字杣ノ鼻（ソマノハナ）を合わせて二例しかない。第二点は杣と藪は相矛盾する語である。すなわち、杣は人工的な造林地であるのに対し、藪は手入れせず生い茂った所の表現であって小字区域の表現としては杣藪という語はなじまない。

字図を見ると、杣藪は大畑町字堂ノ前（ドウノマエ）と境界を分ける。杣藪の東北は字坂ノ上（サカノウエ）で〝境の上〟の意と考えられるので、畧ノ前は〝タオ（境）の前〟の転化とみられる。これらのことから杣藪は〝境界付近（ソバ）の藪地〟の表現と思われる。

前回、蕎麦野を傍地（そば地）と考えたが、共通語の蕎麦はソマと発音する例が多く、傍（側）がソマと呼ばれ杣が当て字されたのであろう。藪地名は共有地（入合地）と見ているが、その推理は項を改めて述べる。

もう一つの視点としては、杣藪の北側は字麓（フモト）であり、字名が町名にもなっている。フモト（麓、府本、棔など）はカコイ（囲、栫、覚丼など）と同じく中世の城兵居住区域とされ、字麓の南側が字城山（シロヤマ）でこの説を裏付けている。杣藪は麓の傍（側＝そば）の藪（無住地）の意とも考えられる。

【うえむら・しげじ／宇土市生まれ、元熊本日日新聞社記者】

お寺と戦争 ⑤

山本 隆英





昭和十六年（一九四一年）

一九三七年（昭和十二年）七月に始まった「日中戦争」の戦火は瞬く間に中国全土に広がり、○○陥落、○○占領、提灯行列三日間等の活字は躍るが、実際の戦線は、中学校教科書にも小見出しで使われる「泥沼化」であった。その泥沼化を打開するため、軍の撤退ではなく戦線拡大の道を選び、昭和十六年太平洋戦争へと進む。その精神的支えを、学校教育、地域社会の集団、宗教団体の教化活動等に担わせることになる。

紙芝居「江南の花」

発行者　浄土真宗真宗本願寺派宗務所　昭和十六年七月二十五日発行　全三十三景　広さB４ノビ。

物語の家族構成　本光寺という浄土真宗の寺院家族で、住職夫妻　副住職である跡取りの僧侶夫妻　その子ども女児一名の五名

時代背景　一九三七年七月の盧溝橋事件に始まる日中戦争は、江南地区（揚子江の南部）上海等へと拡大していくが、その戦場が舞台。

物語の概要　主人公の青年僧侶は、地域の青年会長として僧侶として、夜遅くまで戦死なさったご遺族の家庭を訪問し、慰めの言葉をかけるなどの活動を行っている。彼にもやがて召集令状が届き、配属された部隊は上海であった。戦況は一進一退にみえるが、泥沼化していく様子も描かれている。彼桑月中尉は、隊員二百名を率いる衛生隊中隊長であるが、自らも戦死する。

気になる台詞

主要な場面で、現時点から考えて気になる台詞を、順を追って羅列する。

召集令状来る　夜遅く表の戸をたたく音　トントントン　トントントン　この時お父さんの心にも、お母さんの心にも、電光のようにひらめくものがありました。〝天皇陛下のお召しだった

のであります〟「いよいよ晴れの日が来たぞ、生きて帰らぬことがあっても、軍人の妻だ　軍人の子だ、女々しいことがあってはならぬぞ。」

江南戦線　ほっておけば、塹壕の中は水でいっぱいになってしまふのです。どんどんたまる水をくみ出したあと、「水はましになったが、腹がへったなあ。」第一線の兵隊さんは、もう三日間何も食べずにいたのです。「ここにひとつ最後の堅パンがある、これを分けて食べよう。」堅パンは雨水かクリークの水に浸さなければ喉を通りません。食料がない水がない、唯一の水はクリーク。「こら、クリークの水は飲むな。」「ひと口でも飲ませてください、腹がすいて、腹がすいて」「自ら命をすてるのか、赤痢菌コレラ菌がいっぱいだ。」

戦死　主人公桑月中尉は、中隊長として傷病兵や戦死者の輸送が主たる任務で、「戦傷に倒れなかったなら、吾々はこの疫病予防のために倒れよう。これは敵の刃に斃れて戦死するのと異なるところはない、これが皇国に対する責務を完うするものである。」と訓示するが、自らも顔面は真蒼、三日も食が進まない。看護の甲斐なく昭和十二年十月十八日午後三時死去。森中尉の日記、「…走馬燈クリーク渉リ、蘇州河ヲ渡河シ續、南京ニ急追シテ首都ヲ陥シ……君ガ殉国ノ大義発シ皇猷ヲ扶翼シ奉リ、皇恩無窮ニソノ忠骨ヲ垂レントス」

われらの覚悟　（三十三景最後の場面タイトル名）場面の画は次の熟語二句、「堅心報国」「職域奉公」。台詞全文は、「この奉公、われら銃後にあって、この忠霊に答へ、皇国臣民として奉公の誠を尽くし、一致協力して、堅心報国、職域奉公、これこそ、われらの心かまへでなければなりません。」（江南の花　をはり）

この本文最後に鉛筆で次の一行の書き加えがある。

「皇后陛下の御歌　〝やすらかにねむれとぞおもふ君のためいのちささげしますらをのとも〟」

筆跡は、わたしの父母でも祖父母のでもない。非売品であるこの紙芝居は、おそらく八代組二十一ヶ寺に一組配布され、町のお寺から山の寺へと巡回され、最後が当西福寺だったのだろう。書き込みは、本山や教区の指示か、八代組独自かは不明。

主人公の死を悼む言葉は、痛恨、悲憤錯シテ語続カズ……意思ニ答エントシテ涙を振ルイテ…。

遺された家族についての記述はないに等しい。この紙芝居の意図は、個ではなく公であることが窺える。

【やまもと・りゅうえい／八代市坂本町、西福寺住職】

くまがわ英語塾

外来語から学ぶ英単語（7）…… 藤原　宏

ハンド・ハンディ・ハンサム・ハンドル・ハンディキャップ
hand　handy　handsome　handle　handicap

「**hand**（ハンド）、手」には「手渡す」意の動詞もあり、衣服などの「お下がり」のことを **hand － down**（ダウン）といいます。

handy（ハンディー）は「手先の器用な・扱いやすい」意の形容詞で、**handyman**（ハンディーマン）は「何でも屋・便利屋」のことです。

handsome（ハンサム）の「－ **some**」は「…しやすい・…に適した」意の接尾辞で、「手で扱いやすい」が発展して「均斉がとれている・格好がいい」意が生まれました。英語では男性だけでなく、女性にも使います。

handle（ハンドル）は名詞としては「取っ手」、動詞としては「取り扱う」となります。英語では自転車のハンドルは「**handlebar**（ハンドルバー）、操縦棒」、自動車のは「**steering wheel**（スティアリング　ホイール）、操縦輪」と呼びます。

「**handicap**（ハンディキャップ）、優劣を平均するための条件・不利な条件・障害」は、「**hand in cap**（帽子の中の手）」が語源です。昔、賭事で損得の差を補うために帽子の中のくじを引かせ、罰金を課したのが起こりです。　**(373)**



インフォメーション

10月15日（土）
▽第29回やつしろ全国花火競技大会（八代市球磨川河川緑地）
10月16日（日）
▽第5回とっておきの音楽祭inひとよし（人吉市内中心部）
▽第16回人吉ふれあい百円商店街（人吉市内中心部）
▽織月カップテニス大会ダブルス（人吉市村山公園テニスコート）
▽あさぎり町福祉まつり（須恵文化ホール）
▽第6回勝地梨まつり（球磨村勝地果実共同組合選果場）
▽田んぼの学校inひとよし（球磨地域振興局玄関前集合）
10月18日（火）
▽球磨人吉中体連駅伝大会（あさぎり中SG）
10月21日（金）
▽秋季特別展覧会「写真家麦島勝の世界」（～12月4日、八代市立博物館未来の森ミュージアム）
▽えびすふれあい祭り（多良木町恵比寿神社境内）
▽求麻郷土研10月例会「人吉城跡周辺の文化財調査」（城内駐車場集合）
10月22日（土）
▽第63回人吉球磨総合美展（～27日、人吉市スポーツパレス）
▽誕生60周年記念第1回さがら産業文化祭（～23日、相良村総合運動公園周辺）
▽球商百貨店（～23日、球磨商高）
▽第37回ふれあいまつり〝くまむら〟（～23日、球磨村総合運動公園）
10月25日（火）
▽五家荘紅葉祭（～11月20日、八代市泉町五家荘一帯）
10月29日（土）
▽第39回錦町ふるさとまつり（～30日、錦町町民グラウンド）
10月30日（日）
▽日本遺産巡りエンジョイサイクリングinひとよし球磨（人吉城跡ふるさと歴史の広場スタート）

編集後記

今号は流域で新たに始動する、または始まった出来事を追った。先月号でも紹介した「鶴の湯旅館」の営業再開は流域の話題として歓迎したい。建物の魅力に加え昭和の雰囲気を味わえる懐かしさと、余分なものを加えない潔さがそこにある。昔の暮らしはこんなふうであったろうと実感できる宿でぜひ、見学がてらお出かけいただきたい。★他に球磨川を取り巻く地形からくる暮らしの変遷もをくわしく紹介した。人々がその地域で生きていくにはその環境に順応しなければならない。祖先はどのようにしてこの土地で生きてきたのかを考えるきっかけになればと掲載した。★全体を通して女性の書き手が多く登場しているのも今月の特徴の一つである。いまや女性が都知事になり、米国では女性の大統領が誕生するかもしれない時代、なんら不思議なことではないが、この動きも歓迎したい。地域に根ざして逞しく生きる女性たちには頭が下がる。「負けるな男たち」との自戒をこめて掲載させていただいた。（ま）

〒868―0086
熊本県人吉市下原田町瓜生田675―3
人吉中央出版社「くまがわ春秋」編集部
電話・ファックス 0966・22・7601
info@hitoyoshi.co.jp

【購読者の皆様へ】講読料を未納の方のみ偶数月に「郵便振替用紙」をお送りしています。払い込み号数を確認のうえ、ご送金ください。



本誌の取扱店舗
■清藤書店■ブックスミスミ■明屋書店（錦店・免田店・多良木駅店）
■道の駅さかもと■ TSUTAYA 八代松江店